

渕ノ上遺跡

—長野県小県郡丸子町渕ノ上遺跡発掘調査報告書—

1992.3

長野県上田建設事務所
小県郡丸子町教育委員会

例　　言

1 本書は、県道上田茅野線拡幅改良事業に先立ち実施された渕ノ上遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書の作成は下記の者により分担した。

出土遺物の整理（滝沢敬一・工藤府子）、土器拓本図の作成（工藤府子）、遺物実測図の作成（綿田弘実・贊田 明）、挿図・図版の作成（綿田弘実・贊田 明・滝沢敬一）

本文の執筆 滝沢敬一 [第1章・第2章・第3章・第5章]

　　贊田 明 [第4章 1(1)・(2)・(3)]

　　綿田弘実 [第4章 1(3)・2・3]

3 挿図の縮尺はそれぞれに明示してある。

4 写真の図版の縮尺は、およそ次のとおりである。

石鎌1：1.5、石錐1：1.5、石匙1：1.5、スクレイパー・使用痕のある剥片1：1.5、原石・石核1：1.5、石核・剥片1：1.5、打製石斧1：2、摩製石斧1：2、摩石・凹石1：3、石棒・石皿1：4、台石1：4

5 第2図のスクリーン・トーンは遺跡の推定範囲をあらわし、第4図に用いた網点スクリーン・トーンは、実際に発掘したグリッドをあらわす。

6 本調査に関する資料は、丸子町教育委員会がすべて保管している。

7 発掘調査団の構成

[調査団]

参　　与　　五十嵐幹雄・小林重義・関 孝一・塩入秀敏・竹内一徳

団　　長　　滝沢敬一

調　　査　員　　井上良子・川村寿一・北沢けさ子・清水啓道・塚越安廣・都築 誠
　　中村武人・宮沢博家

特別調査員　　郷道哲章・千葉剛成・贊田 明・綿田弘実

作　　業　員　　池田理恵・乾 達也・大竹篤二・荻原重夫・掛川久美・上沢陽子・小島雅弘・
　　小林照子・清水 清・清水春雄・鷹野祐紀恵・滝沢とも子・田中逸男・田中康弘・
　　中村徳八郎・成沢伸一・平井 純・藤田 香・堀内英一郎・八木宏和・山岸 忠・山口裕志

[事務局]

事　　務　局　長　　池内昭一郎

事　　務　局　員　　小林克孝・工藤府子

監　　査　員　　内堀 修

序

丸子町腰越地区は依田川の上流域にあたり、丸子町用水路の取水口があるなど古くから重要な位置を占めております。このたび交通の要でもある腰越橋のかけ替えにともない同地区で、県道上田茅野線拡幅改良事業が実施されることになりました。

この事業により、古くから「腰越の土偶」出土地として知られている渕ノ上遺跡の保護が必要になり関係機関と協議した結果、発掘調査をして記録に残すことになりました。

発掘調査は事業主体である長野県上田建設事務所より委託を受けた丸子町教育委員会が、新たに丸子町腰越地区埋蔵文化財発掘調査団を組織し実施することになりました。

発掘調査の結果、丸子町では初めての旧石器時代の石器が見つかったほか、縄文時代の多量の土器や石器、あるいは住居址や土壙も発見されました。また、腰越の土偶にともなう弥生土器も発見され、丸子町の歴史解明のための貴重な成果を上げることができました。発掘調査は真夏の酷暑のもとで行われ、調査にあたられた調査員及び作業員の皆様方の苦労には、並々ならないものがありました。心から感謝申し上げます。

また調査にあたっては、腰越区、長野県教育委員会、長野県上田建設事務所の各機関、並びに下村敏、下村恭、大竹憲昭、設楽博巳、寺内隆夫、中沢道彦、百瀬長秀、山岸猪久馬の各氏から御指導・御協力をいただきました。

発掘調査報告書を刊行するにあたり、厚くお礼を申し上げます。

平成4年3月

丸子町教育委員会教育長 田 村 虎 雄

目 次

序

例言

目次

第1章 発掘調査の経過	1
1 調査に至るまでの経過	1
2 発掘調査日誌	1
第2章 遺 跡	3
1 遺跡の立地	3
2 発掘調査区と層序	4
3 渕ノ上遺跡の容器形土偶発見史	4
第3章 遺 構	8
1 住居址	8
2 土壙	9
第4章 遺 物	12
1 縄文土器	12
2 石器	28
3 土製品石製品	30
第5章 むすび	31
参考文献	32

挿図目次

第1図 渕ノ上遺跡周辺の地形図	第12図 包含層出土土器拓本図（2）
第2図 遺跡推定範囲と調査地点	第13図 包含層出土土器拓本図（3）
第3図 グリッド設定図及び遺構分布図	第14図 包含層出土土器実測図（4）
第4図 土層断面図	第15図 包含層出土土器拓本図（5）
第5図 容器形土偶と出土地点	第16図 包含層出土土器拓本図（6）
第6図 1号住居址,7・8・9号土壙実測図	第17図 包含層出土土器拓本図（7）
第7図 1号住居址,7・8・9号土壙遺物分布図	第18図 包含層出土土器拓本図（8）
第8図 1～8号土壙実測図	第19図 包含層出土土器実測図（9）
第9図 1号住居址出土土器拓本図（1）	第20図 包含層出土土器拓本図（10）
第10図 1号住居址出土土器拓本図（2）・ 7号土壙出土土器拓本図	第21図 尖頭器実測図
第11図 包含層出土土器拓本図（1）	第22図 土製品・石製品実測図

図版目次

- | | | |
|--------|------------------------------|-----------------------------|
| P L 1 | 1. 遺跡遠景（北から） | 2. 遺跡全景（西から） |
| P L 2 | 1. 発掘作業 | 2. 土層断面 |
| P L 3 | 1. 1号住居址遺物出土状態 | 2. 北東地区遺物出土状態 |
| P L 4 | 1. 1号住居址, 7・8・9号土壙
(北西から) | 2. 1号住居址, 7・8・9号土壙
(北から) |
| P L 5 | 1. 2号土壙 | 2. 3号土壙 |
| P L 6 | 1. 5号土壙 | 2. 6号土壙 |
| P L 7 | 1. 石鏃（1） | 2. 石鏃（2） |
| P L 8 | 1. 石錐・石匙 | 2. スクレーパー・使用痕のある剥片 |
| P L 9 | 1. 原石・石核 | 2. 石核・剥片 |
| P L 10 | 1. 打製石斧（1） | 2. 打製石斧（2）・磨製石斧 |
| P L 11 | 1. 磨石・凹石（1） | 2. 磨石・凹石（2） |
| P L 12 | 1. 磨石・凹石（3） | 2. 石棒・石皿 |
| P L 13 | 石皿・台石 | |

第1章 発掘調査の経過

1 調査に至るまでの経過

長野県小県郡丸子町大字腰越字部屋田・渕ノ上地籍は、深山沢川の造る扇状地の扇端部に位置し、依田川が形成した河岸段丘上にある。この地籍は、明治43年に弥生時代の容器形土偶が発見された渕ノ上遺跡が所在する所として古くから研究者の注目を集めてきた。この地区で平成3~4年度にかけて県道上田茅野線拡幅改良事業が実施されることとなり、平成2年10月8日、事業主体である長野県上田建設事務所、長野県教育委員会文化課、丸子町教育委員会の3者により工事区域内の埋蔵文化財の保護協議がなされた。その結果、渕ノ上遺跡について事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

本年度は当初、670万円の予算で1,000m²以上を発掘調査する予定であったが、本年度の工事に該当する遺跡の範囲が400m²ほどであることが判明したため、約280万円の予算で発掘調査が行われることとなった。調査費は事業主体である上田建設事務所が全額負担し、調査は、上田建設事務所の委託を受けた丸子町教育委員会が発掘調査団を組織して実施することとなった。

発掘調査は事業主体の工事計画や調査員・作業員の収集できる時期を考慮し、7月下旬から8月中旬にかけて実施した。また、平成3年6月25日には事業主体と町教育委員会、町教育委員会と発掘調査団の委託契約を締結し、文化財保護法第98条の2第1項の規定による通知を行った。

2 発掘調査日誌

7月28日（日）晴れ後雨 本日より発掘調査を開始する。作業開始に先立って結団式が行われ、田村教育長のあいさつがあった。A19~D18グリッド、A14~D13グリッドを掘り下げて遺構確認を行った。[滝沢ほか調査員9人、作業員25人参加]

7月29日（月）晴れ F・G区に人を配して発掘を進めた。午後土壙の掘り下げと調査区の全体測量を行った。[滝沢ほか調査員5人、作業員21人参加]

7月30日（火）曇り後雨 G・H区に主力を投入し、発掘を進めた。午後雨のため調査を中止した。[滝沢ほか調査員3人、作業員19人参加]

7月31日（水）晴れ G・H区の掘り下げと重機による石垣の取りはずしを行った。午後B・C区に人を配して掘り下げを進めた。[滝沢ほか調査員4人、作業員20人参加]

8月1日（木）晴れ B・C・D区の掘り下げを行う。また、土層断面の実測とC17・18グリッドの土壙の掘り下げを行った。[滝沢ほか調査員4人、作業員20人参加]

8月2日（金）晴れ B・C・D区の掘り下げを続行する。C17グリッドの土壙の掘り下げを併せて行った。[滝沢ほか調査員2人、作業員21人参加]

8月3日（土）晴れ B・C・D区の掘り下げと遺物出土状態の測量を行った。[滝沢ほか調

査員 7 人、作業員 19 人参加]

8月4日（日）晴れ B・C区の掘り下げを行った。B区とC区の境から住居址が1軒検出された。[滝沢ほか調査員 6 人、作業員 17 人参加]

8月5日（月）晴れ 高校生の作業員は丸子町公民館で遺物洗いを行い、一般の作業員により B・C区の掘り下げを行った。午後 B区の清掃と C区の掘り下げを行った。[滝沢ほか調査員 3 人、作業員 21 人参加]

8月6日（火）雨 朝からの雨のため発掘調査を中止して丸子町公民館において遺物洗いを行った。午後遺構の写真撮影を行った。[滝沢ほか調査員 1 人、作業員 16 人参加]

8月7日（水）雨 昨日に続いて雨のため発掘調査を中止し、丸子町公民館において遺物洗いを行った。[滝沢ほか調査員 1 人、作業員 15 人参加]

8月8日（木）晴れ 午前中丸子町公民館において遺物洗いを行った。午後高校生の作業員は遺物洗いを行い、一般の作業員は C区の掘り下げを行った。また、B区の測量を併せて行った。[滝沢ほか調査員 3 人、作業員 17 人参加]

8月9日（金）晴れ 高校生の作業員は丸子町公民館において遺物洗いを行い、一般の作業員は 1 号住居址の掘り下げと C区の土器集中地点の掘り下げを行った。午後 1 号住居址の測量を行った。[滝沢ほか調査員 2 人、作業員 18 人参加]

8月10日（土）晴れ 1号住居址と土壌及び C区土器集中地点の測量を行った。また、土器集中地点の掘り下げを併せて行った。[滝沢ほか調査員 6 人、作業員 6 人参加]

8月11日（日）晴れ 1号住居址と土壌の測量を行った。また、各土壌の写真撮影と C区土器集中地点の掘り下げを完了し、測量を行った。[滝沢ほか調査員 6 人、作業員 4 人参加]

8月12日（月）晴れ 1号住居址の掘り下げと測量を行った。[滝沢ほか調査員 1 人参加]

8月13日（火）晴れ 1号住居址と 7 号土壌の掘り下げと測量を行った。[滝沢ほか調査員 1 人参加]

8月14日（水）晴れ 1号住居址と 7・8・9 号土壌の掘り下げを行った。午後これらの遺構の測量を行った。[滝沢ほか調査員 2 人参加]

8月15日（木）晴れ 午前中 6 号土壌と自然斜面の測量を行った。午後機材の撤収を行った。[滝沢ほか調査員 1 人参加]

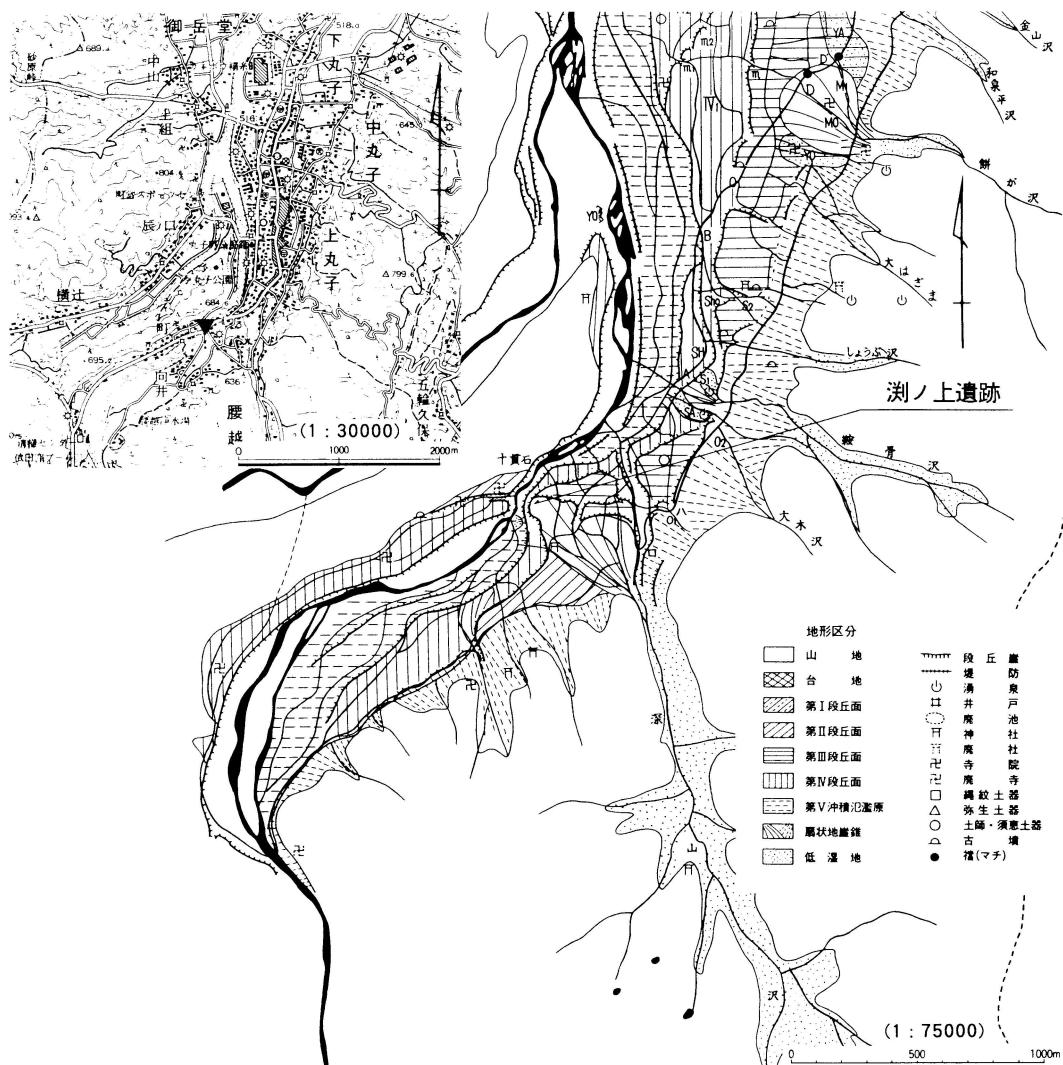
8月16日（金）晴れ 午前中 1 号住居址と 7・8・9 号土壌及び遺跡全景、遠景写真の撮影を行い、調査を終了した。[滝沢参加]

なお、発掘調査後の遺物整理作業は滝沢、綿田、工藤が主になって進められ、遺物洗い・注記・復原・実測図の作成等の作業を行った。報告書の原稿については、1月11日（土）に報告書執筆分担会議を行い、例言のとおり、各々が執筆を分担することになった。原稿は平成4年2月一杯に書き上げることを確認し、それを持ち寄って3月21日（土）に編集会議を行った。

第2章 遺跡

1 遺跡の立地（第1図）

渕ノ上遺跡は、深山沢川が形成した扇状地の扇端部に位置し、依田川右岸の断崖上に立地している。扇状地は扇頂部で570m、扇端部で555mの高度を有し、上丸子地区や腰越地区の第Ⅲ・Ⅳ段丘面より高い。また、第Ⅰ段丘面の形成期からつくられた古い扇状地の原形面を残している。この面上にはかつての依田川の流路と思われる田切地形があり、ここを通過する用水の上堰はこの地形に左右されている。そして依田川が十貫石の峡谷に穿入し、第Ⅲ段丘面を形成した時期以降は、依田川の浸食を受けずに存在してきた。



第1図 渕ノ上遺跡周辺の地形図（丸子町地域開発史より抜粋）

しかし、深山沢は扇状地の東半分のはば中央を流れて十貫石の峡谷の下で依田川に合流しており、この沢自体も依田川の回春に伴って下刻浸食をしたため大峡谷をなしている。そして、この扇端部も依田川の洗う所となって第Ⅲと第Ⅳの段丘面が形成されている。

高位の深山沢扇状地や十貫石の大淵小淵の狭谷と深山沢の深い峡谷は、腰越地区と上丸子地区との交通上の障害となっている。

2 発掘調査区と層序（第3・4・5図）

調査区は倉庫が建てられていた跡地へ東西約30m、南北約20mの範囲で設定し、ほぼ中心に基準杭（G1）を設けた。基準杭から磁北を通る軸とそれに直交する軸を基準に1辺10mの大グリッド8区画を設定した。大グリッドの呼称は西から東へA～D,E～Hとし、さらにこの中を2m四方の小グリッド25区画に区分し、西から東へ1～25の小グリッド番号をつけた。ただし調査区の状況からD・E区の一部は排土場所とした。

調査はまず全地区にわたって遺構の確認を行なった。B・C区に遺構が集中し、B・C区北側の地区からも遺物の出土が認められたため、新たにB-・C-・D-区を設定し、これらの地区に調査の主力を置くことにした。この結果、実際に掘り下げを行った面積は約520m²となった。

なお、遺物の出土地点等については、例えば「A15」のように、「大グリッド名・小グリッド番号」と注記することにし、遺物は遺構に伴うもの以外は小グリッド単位で収納し、遺構等の測量は平板測量と遣り方測量によった。ベンチマークは県道拡幅改良事業の測点（標高555.51m）を用いた。

全調査区のうち土層断面を記録したのは、調査区北端の断面のみである。I層は客土で、拳大の礫を多く含む。II層は遺物包含層で拳大から人頭大の礫石を多く含む。黒褐色を呈し、縄文時代中期の土器片が大量に出土した。III層はしまりの良い茶褐色土層で鶏卵大の小礫を含む。IV層はローム層で、黄褐色を呈する。縄文時代の地山面である。

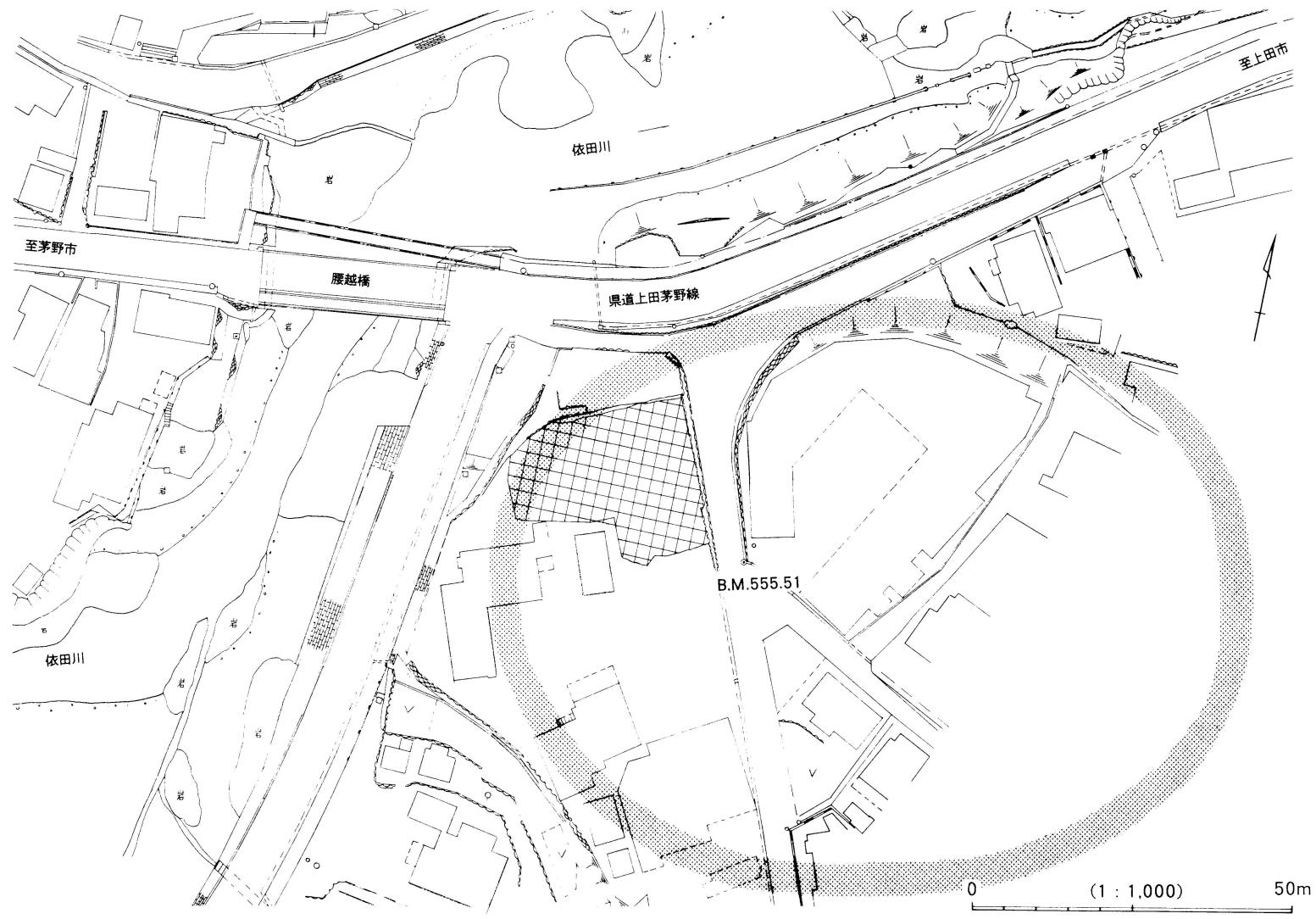
本調査区は依田川に面した扇状地末端部にあたるため、全体が北に傾斜している。このうち倉庫跡地部分は整地のため、地山層が露呈した平坦面をなし、この北側の石垣を取り除いた部分は黒色土層が堆積した急斜面である。この地点はグリッドB4からD2にかかり、縄文時代前期後半の1号住居址、7・8・9号土壙、中期後半の2・5・6号土壙が分布する。また、包含層の残る約30グリッド120m²程度から出土した遺物量は整理用平箱約150箱にのぼる濃密さである。

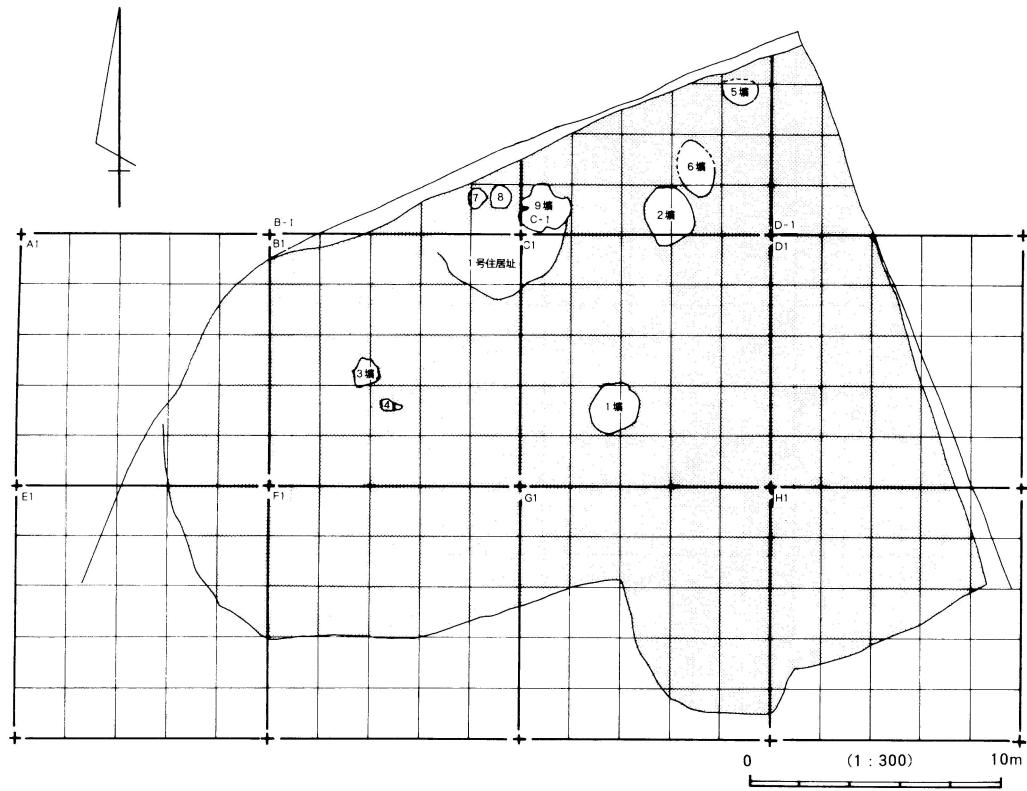
3 淊ノ上遺跡の容器形土偶発見史

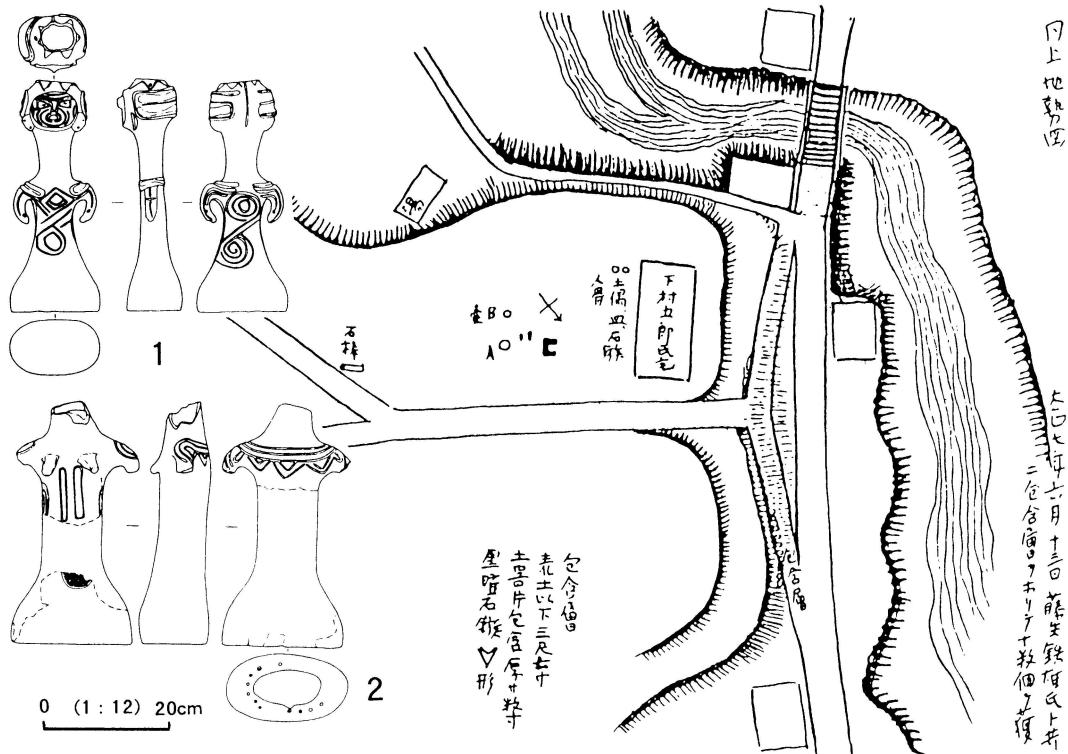
渋ノ上遺跡は、明治43年に弥生時代の容器形土偶が発見された遺跡として古くから学界の注目を集めてきた。ここでは容器形土偶の発見された状況とその研究史について述べてみたい。

大正6年、和田千吉氏は『考古学雑誌』八一三の口絵で渋ノ上遺跡出土の土偶を「奇形の男子にして、普通石器時代土偶に見るが如き両脚を有せずして、下部は平なり、内部空虚・両腕には孔

第2図 遺跡推定範囲と調査地点







第5図 容器形土偶と出土地点（小山真夫野帳より）

を穿ちあり、紋様等又普通のものと異りたれど、所謂石器時代のものとして見るべきものなるべし、亦た之と共に首部並両腕を缺失せる同様の女子土偶を発掘した」と初めて紹介した（和田 1917）。続いて小山真夫氏は大正11年発行の『小縣郡史』で「遺跡は初め田圃なりしが、明治四十三年九月此田を壞して搔きならす際、地下凡二三尺にして、其西南隅に黒曜石製石鏃、及び同破片、折れたる大石棒、土器片、男女土偶二體、歯牙、骨片等を得たり。」と出土状態を述べ、さらに容器形土偶について、姿勢・頭部・面部・上肢・服部・下肢・胴部・乳部・製作の項に分けて詳述している。また、大正14年、八幡一郎氏は「遺跡にある自然石」で容器形土偶の発見状態について触れ、地表下マイナス90cmのところに平石を箱状に組み、その中より検出されたと報告している。以後、甲野勇氏、永峯光一氏、野口義麿氏、水野正好氏、小野美代子氏、藤沼邦彦氏、柴田俊彰氏、小林達雄氏、石川日出志氏、宮下健司氏などが容器形土偶について述べる際に渕ノ上遺跡出土の容器形土偶は、必ず取り上げられてきた。なかでも宮下健司氏は、昭和58年に長野県史の資料調査に伴い、渕ノ上遺跡の容器形土偶の実測図を初めて作成し、「縄文土偶の終焉」のなかで容器形土偶について集成し、明確な考察を加えている（宮下 1983）。

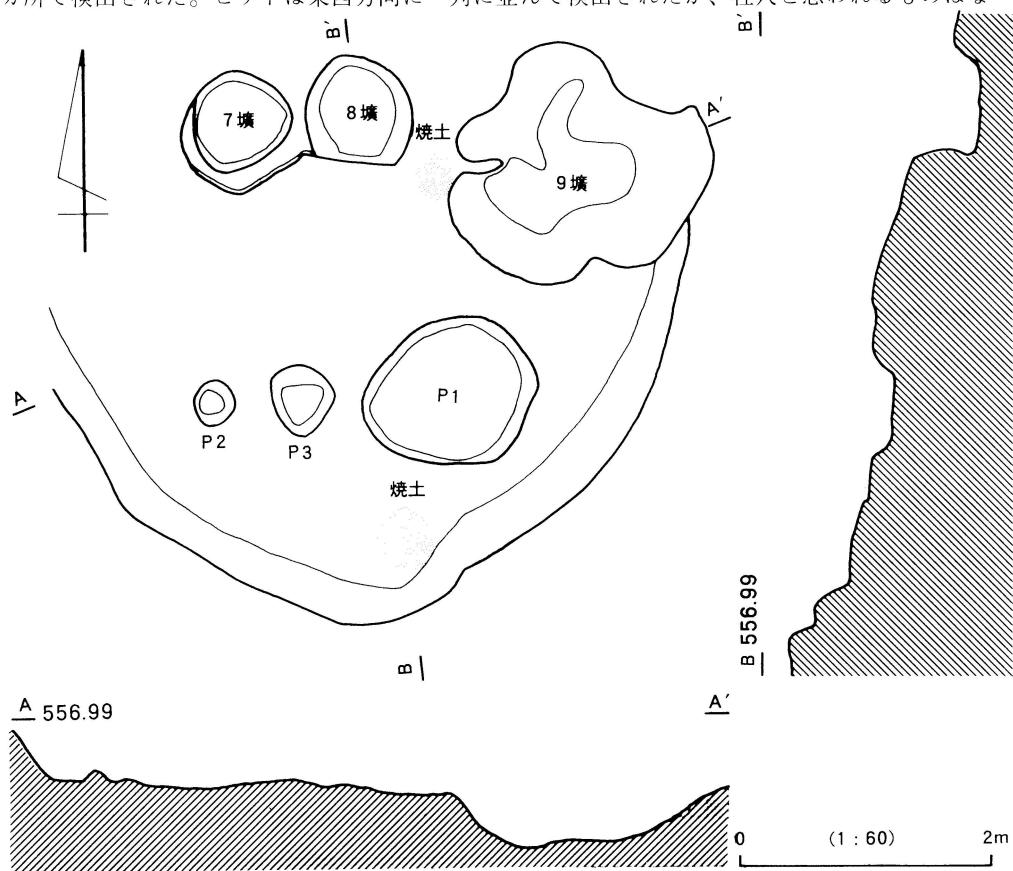
現在、この容器形土偶の明確な出土地は不明であるが、今回の調査で縄文時代前期の住居址の覆土上部と周辺から水神平式土器を含む縄文時代晚期後半から弥生時代中期初頭の土器が出土しており、容器形土偶の帰属時期が示唆される。

第3章 遺構

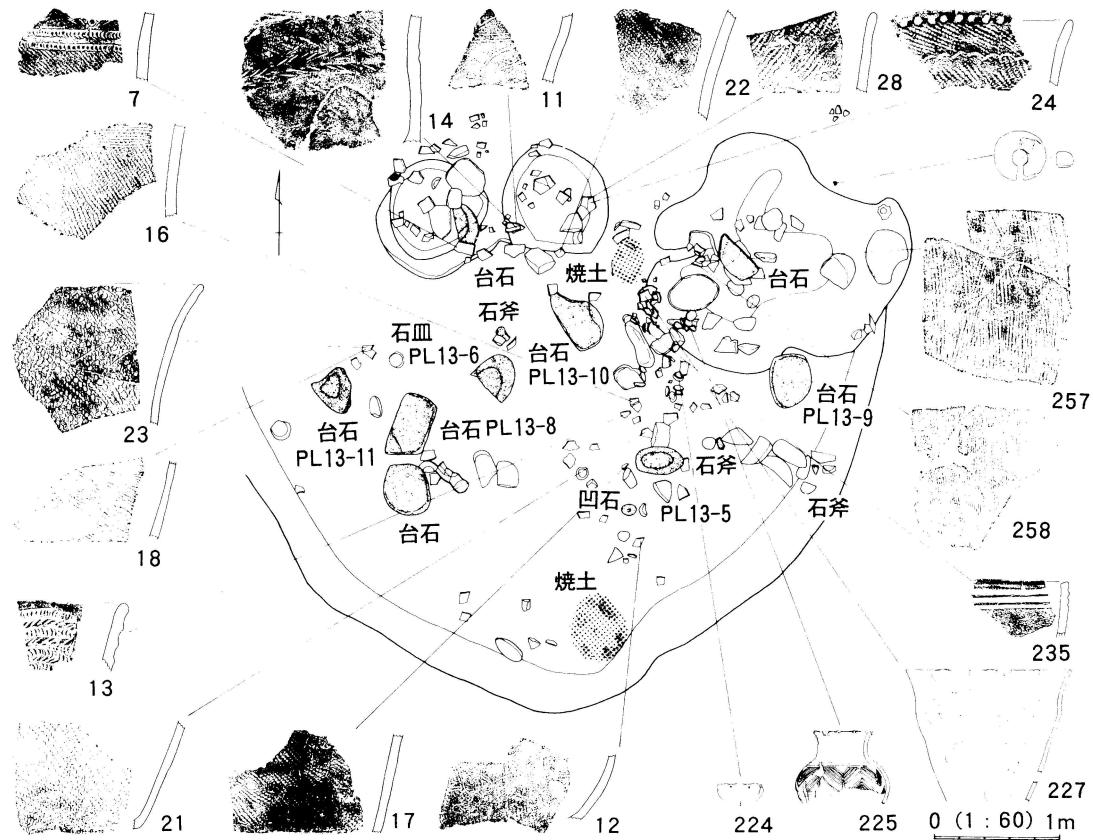
1 住居址

1号住居址（第6・7図、PL3・4）

B4・5・10,B-4・5,C1・C-1を中心とする地点にある。遺構検出の際、溝状の黒褐色土中に遺物を含む部分が認められたが、平面でのプラン確認は困難であった。また、当初から遺物の出土量が多くいたためサブトレーンチをあけることができず、壁・床の確認が遅れた。掘り下げ中に覆土上部から縄文時代晩期後半から弥生時代中期初頭の土器が出土した。本址は、北側に傾斜した急斜面を利用して建てられている。北側の壁は7・8・9号土壙により切られており、不明である。住居址の長さは東西方向で最大5.3mを測る。恐らく不整円形を呈すると思われる。覆土は暗褐色土の単層で、鶏卵大から拳大の礫を多量に含む。床面は傾斜しており、小礫を含む所と凝灰岩が露出している所、緻密なローム面の3つに分かれる。壁は急に立上がり、検出面からの深さは最深部で30~40cmを測る。炉と思われる焼土は、南壁隅と中央部やや北寄りの9号土壙付近の2カ所で検出された。ピットは東西方向に一列に並んで検出されたが、柱穴と思われるものはな



第6図 1号住居址・7・8・9号土壙実測図



第7図 1号住居址7・8・9土壤遺物分布図

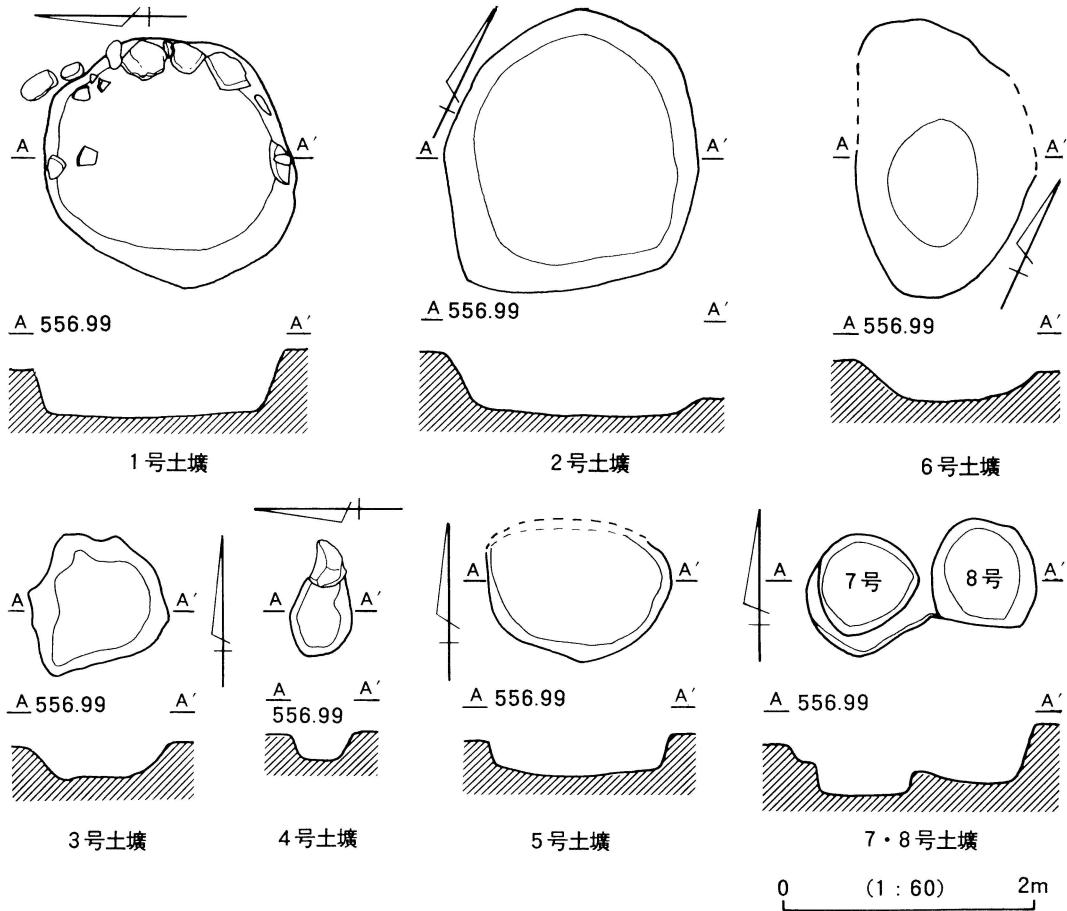
かった。なおP1からは縄文時代前期の土器と石器が出土している。遺物は多量である。特に石皿と磨石が多く出土しており注目される。土器は住居址全域から出土している。石鏃、石斧などのほか、玦状耳飾りも出土している。本址の時期は床面から出土した土器から諸磯a式期と思われる。ただし、それ以降の土器も出土しており、住居の廃棄から埋没までの時間幅を考慮して遺物を把握する必要があろう。

2 土 壤

検出された土壤は9基である。住居址を切っているものが3基ある。平面形の基本形には、円形・橢円形があり、断面図は壁の立ち上がりが急で、底面が平坦なたらい状のものと底面が下弦弧を描く鍋底状のものがある。土壤の時期決定は出土遺物によったが、伴出遺物のないものについては、検出面、覆土が共通なこと、住居址の南側にあることから、縄文時代に属するものと推定した。

1号土壤（第8図）

C17・18に位置する。直径200cmの円形を呈し、深さは53cmを測る。断面形はたらい状を呈



第8図 1~8号土壤実測図

し、底部は堅緻である。壁から人頭大の石が4点出土している。また、底部から縄文時代中期の土器片が5点出土している。

2号土壤 (第8図・PL5)

C3・C-3・4に位置する。北西方向に長軸をとり、 $220 \times 200\text{cm}$ の不整円形を呈する。最深部は検出面から60cmを測る。断面形はたらい状を呈し、底部は堅緻である。遺物は縄文時代中期の土器片が6点と土偶の脚部が1点出土している。また、南北の壁高の差が40cmに達する。

3号土壤 (第8図・PL5)

B12・13に位置する。直径110cmの不整円形を呈し、深さは27cmを測る。底部は堅緻であるが、凹凸があり、断面形は鍋底状を呈する。底部から縄文時代中期の土器片が1点出土している。

4号土壤 (第8図)

B18に位置する。東西方向に長軸をとり、 $60 \times 50\text{cm}$ の不整椭円形を呈する。壁はやや急に立上がり、断面形はたらい状を呈する。底部は堅緻である。伴出遺物はない。

5号土壙 (第8図・PL6)

C-15に位置する。東西方向に長軸をとり、145×110cmの楕円形を呈する。北側の壁は不明瞭である。壁は急に立上がり、断面形は鍋底状を呈する。底部は軟弱である。深さは40cmを測る。底部から石棒が1点と縄文時代中期の土器片が6点出土している。

6号土壙 (第8図・PL6)

C-4・9に位置する。北西—南東方向に長軸をとり、220×140cmの楕円形を呈する。西壁と東壁の一部が不明瞭である。壁はなだらかに立上がり、断面形は鍋底状を呈する。底部は堅緻である。底部から拳大から人頭大の石が14点出土したほか、縄文時代中期の土器片が2点出土している。

7号土壙 (第6・8図・PL4)

B-4・5に位置する。8号土壙と並列しており、1号住居址を切っている。直径80cmの円形を呈し、壁は垂直に立上がる。西側と南側は2段になっており、下段の深さは20cmを測る。断面形はたらい状を呈し、底部は堅緻である。覆土中や底部から縄文時代前期の土器片が出土している。また、半円形の台石が1点出土している。

8号土壙 (第6・8図・PL4)

B-5に位置する。7号土壙と並列し、1号住居址を切っている。直径85cmの円形を呈し、壁は垂直に立上がる。深さは、南・東側が深く、40~45cmを測り、北・西側は6~16cmを測る。断面形はたらい状を呈し、底部は堅緻である。覆土中や底部から縄文時代前期の土器片が出土しているほか、人頭大の河原石が2点出土している。

9号土壙 (第6図・PL4)

C-1に位置する。東北—西南方向に長軸をとり、215×185cmの不整楕円形を呈する。1号住居址の東壁を切っている。壁はなだらかに立上がり、断面形は鍋底状を呈する。底部は北側に傾斜しており、堅緻である。深さは63cmを測る。覆土中から縄文時代前期の土器片が出土している。

第4章 遺物

1 繩文土器

(1) 1号住居址出土土器（第9図1～第10図30）

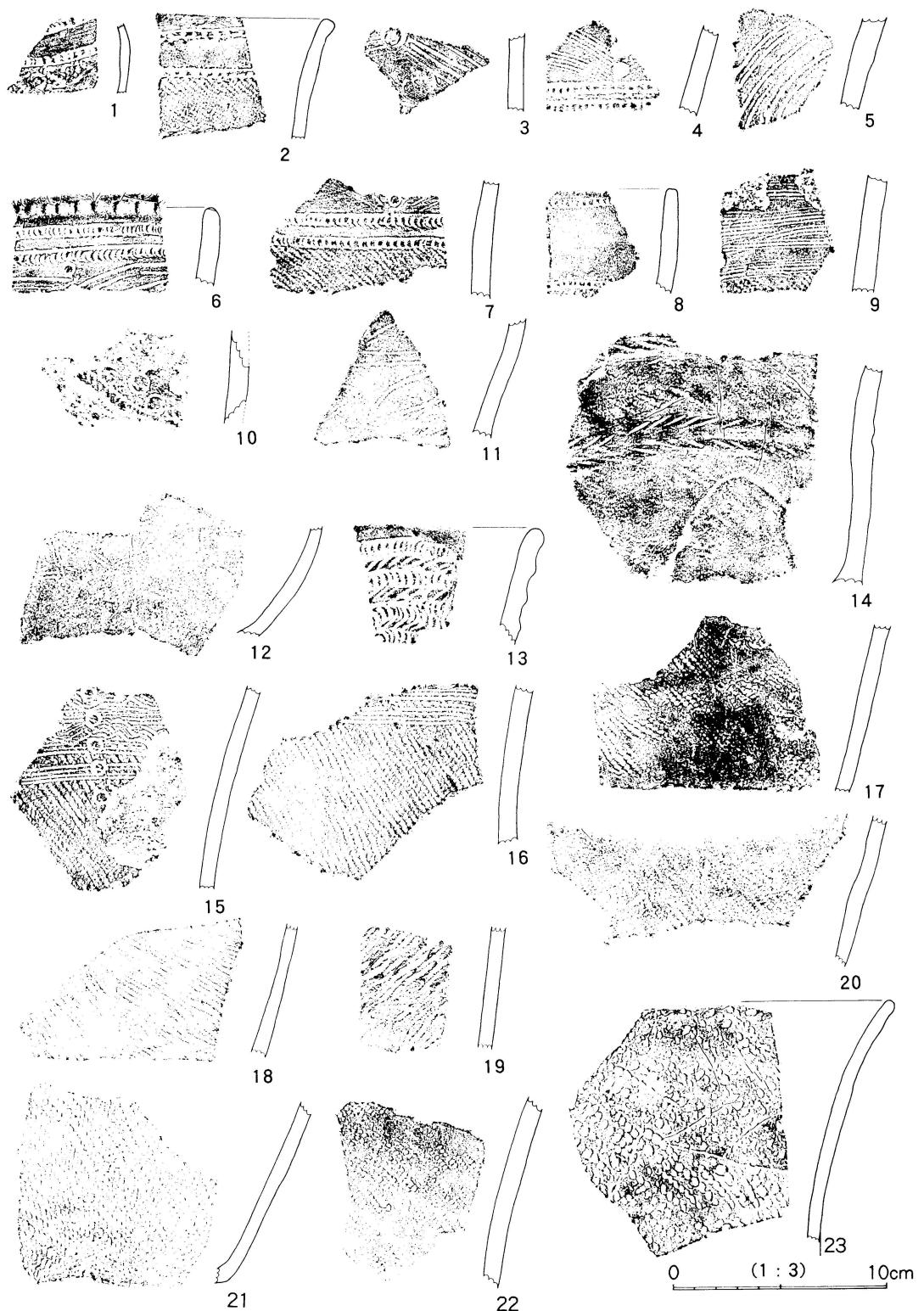
1は爪形文・縄文RLが施される。器壁は薄手で白褐色を呈し、内面に指頭痕？が見られる。2は爪形文・縄文RLが施される。爪形文は平行沈線→爪形文の順序で施文されるが、この時器面に對して直角に刺突される。色調は褐色を呈し、内面はヘラミガキが行われている。3～7は肋骨文を施文する土器であるが、櫛歯状工具によるもの（3・4）と、半截竹管によるもの（5～7）とが見られる。櫛歯状工具は3が3本、4が5本単位となる。6・7は同一個体で、口唇部直下及び頸部の爪形文によって口縁部文様帯を形成し、その中へ肋骨文を描いていると思われる。色調は3・6・7が淡褐色を、4・5が茶褐色を呈する。8は口縁部に沿って2列の爪形文を巡らしている。茶褐色を呈し、胎土に雲母を特徴的に含む。9は櫛歯状工具（単位は5本）で平行沈線を描いており、色調は茶褐色を呈する。また、下端の縄文はRLである。10は爪形文・円形刺突文を施文する。色調は褐色。11はヘラ状工具？による単沈線で木の葉状文を描く。ヘラ状工具？が使用されるのは、本住居址中1点のみである。色調は褐色を呈し、また、内面は丁寧に調整されている。12は口縁部にてやや内湾する鉢形の土器と思われ、節の細かい縄文RLを施文後、幅の狭い半截竹管によって文様が描かれる。色調は褐色。13は刻みを持つ浮線文間へ爪形文を密接に施文する。色調は白褐色。14は刻みを持った2列の浮線文を巡らしている。色調は茶褐色。15・16は同一固体で、縄文RLを施文後、櫛歯状工具によって波状文を描いている。櫛歯状工具の単位は4本、色調は褐色を呈する。

17～30は縄文のみを施文する土器である。無節（18・19）・单節（17・20～30）が見られるが、中心をなすのは節の細かい单節斜縄文である。そのなかで23は、節の大きめな縄文を施文している。原体は18・19がR、17・20～30がRLで、全て右撲りである。24は、原体の末端部を縛っている。色調は17・26・30が茶褐色、18・19が暗褐色、20・22・23が褐色、21・24・25・27～29が淡褐色を呈している。

以上出土土器を概観したが、1は北白川下層II b式、13・14は諸磯b式、それ以外は諸磯a式に比定できよう。

(2) 7号土壙出土土器（第10図31～38）

33は半截竹管によって平行沈線文を施文する土器で、口唇部上に爪形文が刺突される。35は縄文上に細く密集した沈線文が施される。38は櫛歯状工具で肋骨文を描いている。頸部に区画線を設定し、口縁部文様帯と胴部文様帯とを明確に分けている。胴部は縄文RLが施文される。



第9図 1号住居址出土土器拓本図 (1)

31・32・34・36・37は縄文のみ施文される土器で、無節（34）、単節（31・32・36・37）が見られる。原体は34がL、31・32・36・37がRLである。色調は31・34・35が褐色、32・36～38が淡褐色、33が茶褐色を呈している。35は諸磯b式、それ以外は全て諸磯a式であろう。

(3) 遺構外出土土器（第11図～第20図）

第1群土器（第11図39～48・50）縄文早期の土器を一括する。本群は時期によって更に細分できる。

1類（39）浅い沈線文及び刺突を施す土器で、内面は軽い条痕調整が行われる。頸部の破片で、口縁部にむかって外側に開く器形をなすと思われる。焼成は良好で堅く、色調は褐色を呈する。

2類（40）柏畠式と思われるものを本類とするが、図示した1点のみの出土である。焼成良好、色調は褐色を呈する。

3類（41～48）押型文を本類とする。山形文を施文する土器（41～45・47）と、楕円文を施文する土器（46・48）とが存在する。山形文の施文構成は、縦位施文によるもの（41）、無文部を構成する横位施文によるもの（42・43）、横位密接施文によるもの（45）、の以上3者が見られる。41は縦位施文であることの他に、山形文の線が細い、圧痕が浅い等本類中に於いて異質な感じを受ける。また、小破片である為はっきりしないものの、その一部がナデ消されている可能性がある。47は口縁部の破片であるが、口唇部に原体の末端部を刺突している。楕円文（46・48）はいずれも横位密接施文によると思われる。46は、楕円の粒が丸状に近い。色調は41・48が茶褐色を、それ以外は褐色を呈する。

4類（50）絡条体圧痕文の土器を本類とする。図示した1点のみの出土であり、焼成はやや不良、色調は白褐色を呈する。

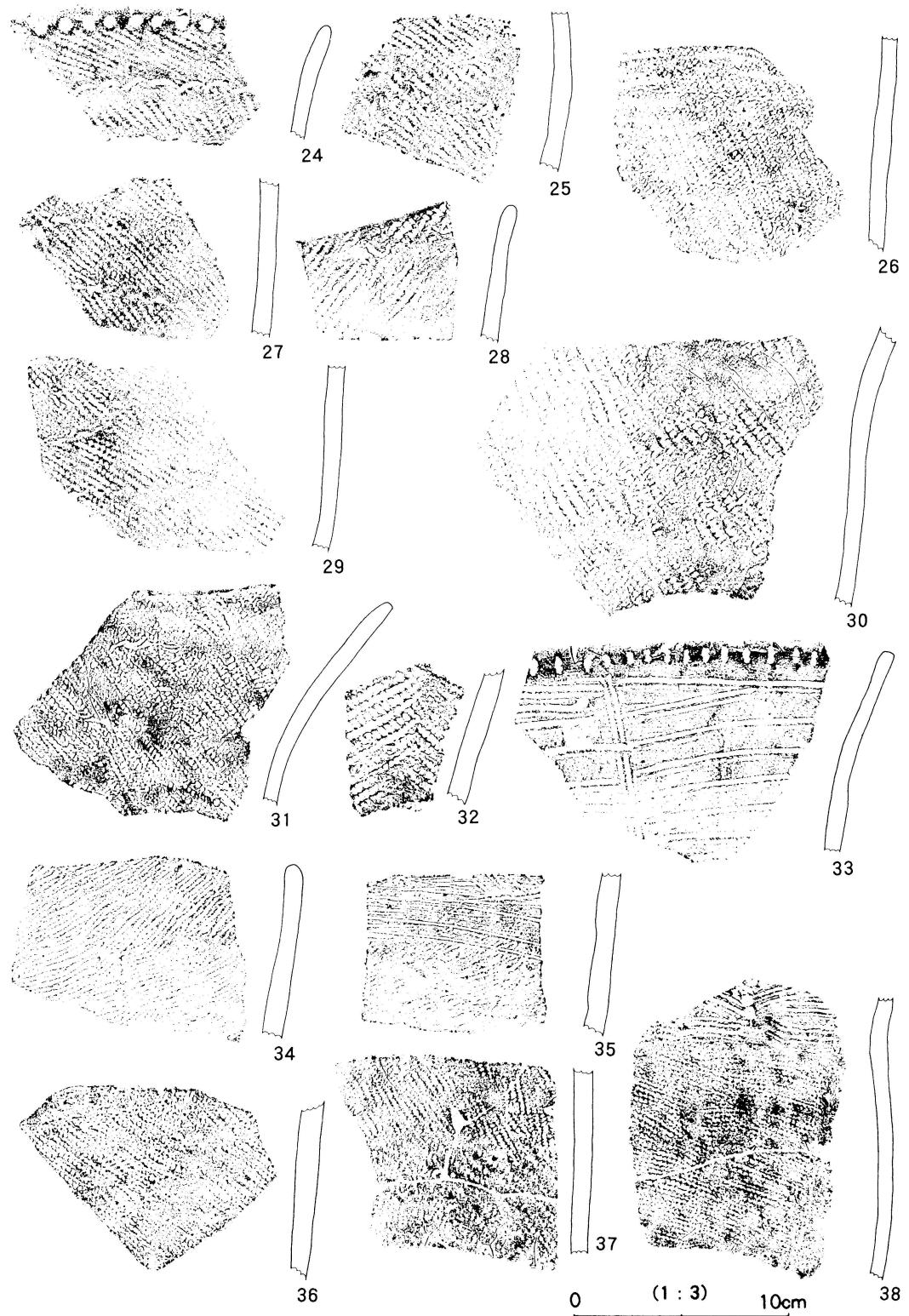
第2群土器（第11図49・51～第14図125）縄文前期の土器を本群とするが、1類～6類に分類できる。

1類（49）中道式を本類とする。肥厚しない4単位波状口縁の土器で、波頂部から隆帯が垂下する。単節縄文が施文されるが、器面が荒れているため原体は不明である。焼成はやや不良で、色調は淡褐色を呈する。

2類（51～69）神ノ木式～有尾式を本類とする。連続刺突文・列点状刺突文及び爪形文が施されるが連続刺突文は1点のみ（57）で、主体は列点状刺突、爪形文にある。57は口縁部の破片で口唇部直下に無文部を残して連続刺突文が施文される。櫛歯状工具の幅は狭く、単位は3本である。

列点状刺突文は、菱形文を構成するもの（51・65）、横位に数列巡らせるがその間隔が密なもの（52）と広いもの（61）、条線との組み合わせによるもの（53）、口唇直下に狭い文様帯を形成し縦位刺突するもの（54）、半截竹管で浅い平行沈線を引いた後、それに沿って刺突を行うもの（55・59）、波状口縁に沿った条線上に縦位刺突を行うもの（60）等、極めてバラエティーが多い。

爪形文を施文するものは、口唇部直下の狭い文様帯へ1列の爪形文を巡らせるもの（66・68）と3列巡らせるもの（62）とがあり、いずれも以下は縄文が施されている。また、63・64・69の



第10図 1号住居址出土土器拓本図(2)・7号土壤出土土器拓本図

様な土器も存在する。尚、爪形文はいずれも器面に対して直角に刺突される。

肥厚口縁をなすものは66・68の2点で、いずれも爪形文を施文する土器である。また、67以外は胎土に纖維を混入しない。

3類 (70~95・122~125) 諸磯a式を本類とする。71~76・78・79・122~125は肋骨文を施文する土器で、半截竹管によるものと櫛齒状工具によるものが見られる。77・81・82は対角線文が施文される。肋骨文同様、半截竹管・櫛齒状工具が使用されている。85~87は円形刺突文が施されるが、縄文上に縦一列の刺突を行うものと、多くの刺突を行うものとの両者が存在する。88・89は木の葉状文及び円形刺突文が施文される。90~95は波状文を描く土器で、波状文の大きさ・幅等、若干のバラエティーがある。

4類 (96~103・120) 諸磯b式を本類とする。96は口縁部の破片で、浮線文上に刻みが加えられる。97~102は爪形文が施されるが、全体の文様構成は不明である。103は集合沈線文系統の土器で縄文上に細かい沈線が施文される。また、浅鉢が出土している(120)。

5類 (104~107) 諸磯c式を本類とする。104は緩い波状口縁をなし、波頂部に耳状の突起が付けられている。また、密集した横位沈線が施文される。105~107は胴部の破片で、縦または横方向の沈線が施文される。105・107は沈線上に円形のボタン状突起を付着している。

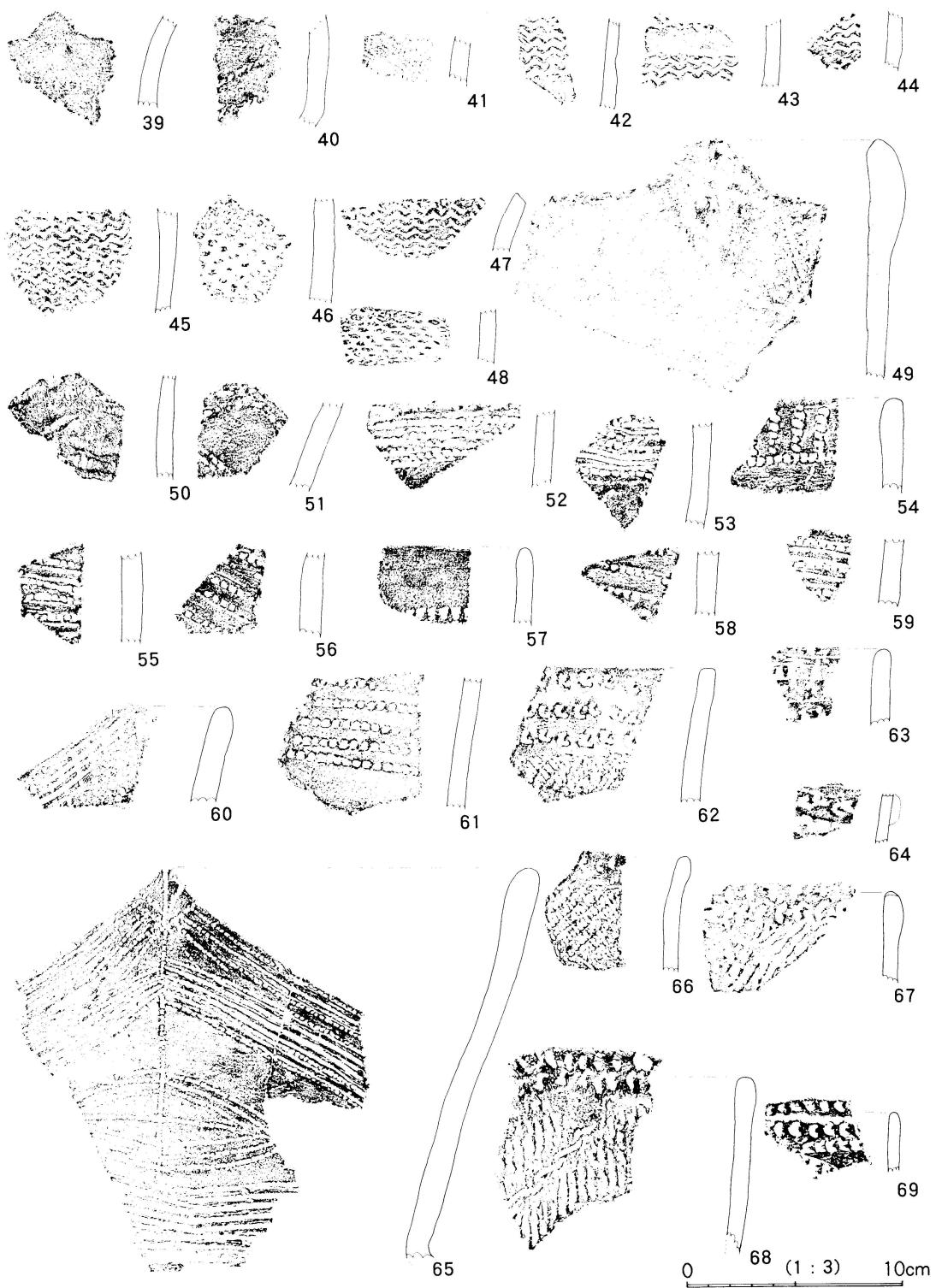
6類 (108~119) 北白川下層式を本類とする。109は北白川下層Ia式、108・110・111は同Ib式で108・110・111の内部には条痕が残る。112~117は同IIa式であり、幅の広い密接した爪形文が施される。119は同IIc式で、やや内湾気味の口縁部上端に刻みを持った隆帯が付されている。

第3群土器 (第15図126~第19図222) 縄文中期の土器を一括する。

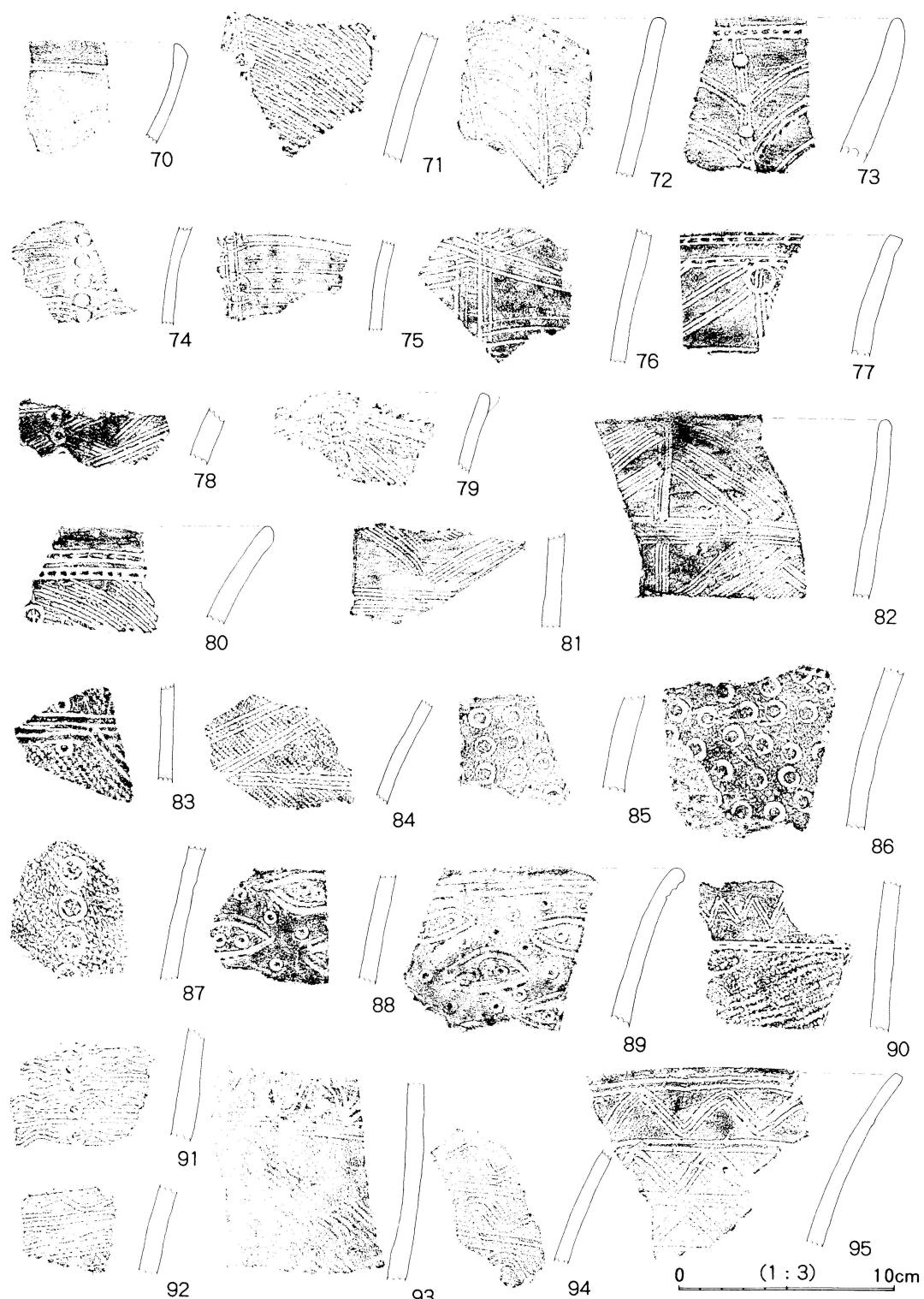
1類 (126~149) 初頭段階の土器で、平箱2箱出土。126は三角印刻文、127は横位羽状の竹管文をもつ五領ヶ台I式。128~135は竹管による格子目文を地文にもつ一群、137~143は縄文地文の一群である。136は折衷的。129・131・133・135・138は口縁内面や突起の側面にも施文され、129・131・138は半截竹管内面で口縁内面の稜を仕上げており、新保式の影響と見られる。139・140・142は小形の橋状把手をもつ。これらは五領ヶ台IIa式頃で、1類の主体となる。144には北陸的な小突起がつく。146~148は複列の沈線と刺突で施文され、147は千曲川流域にしばしば見られる。149は内面施文の浅鉢。これらは同IIb式頃である。

2類 (150~155) 中葉段階の土器で、20片程度出土。150は新道式、151は同時期頃の竹管文をもつもの、155は藤内式、152・153は併行する焼町土器、154はやや新しい焼町土器である。

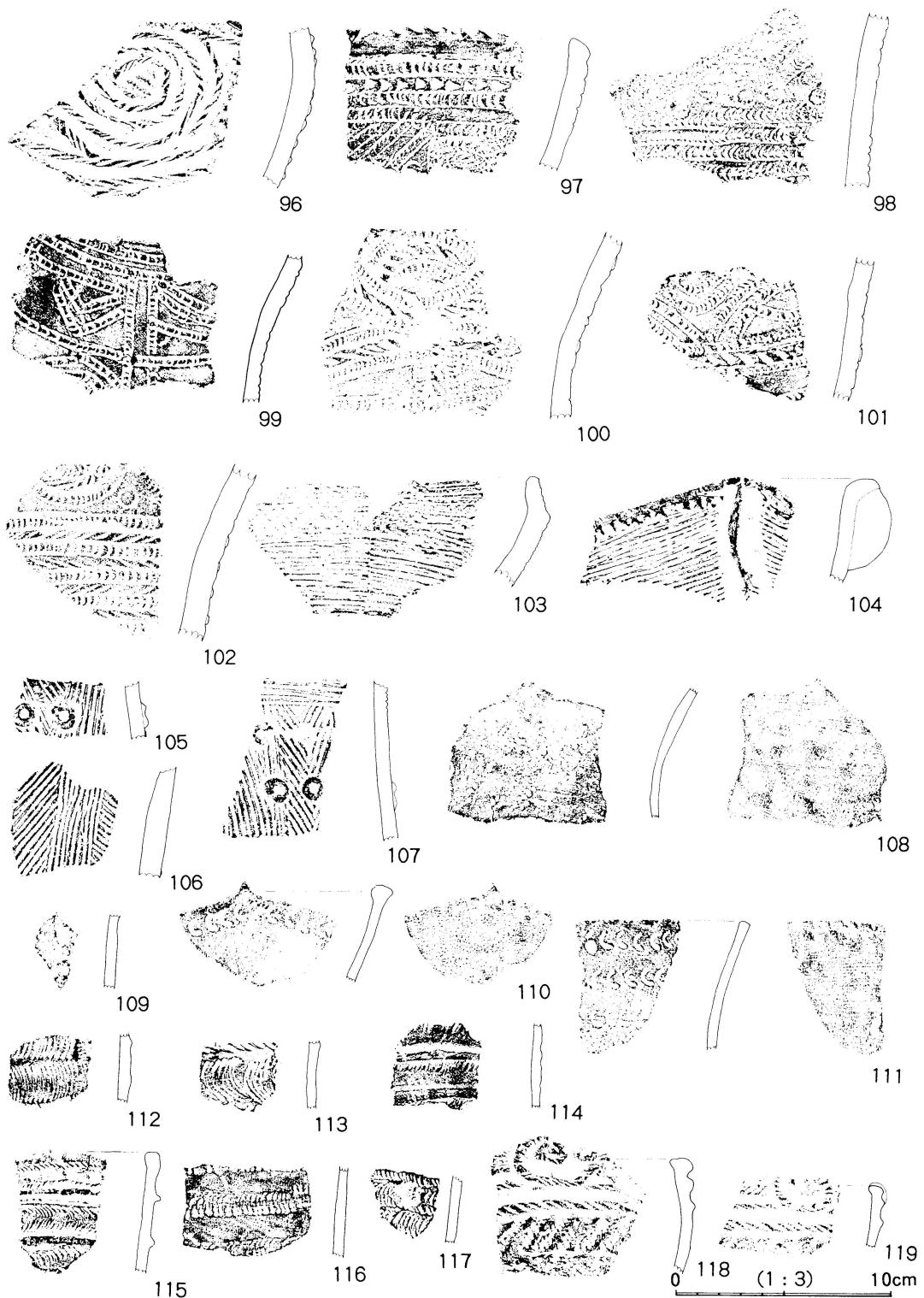
3類 (156~222) 後葉段階の土器で、70箱にのぼる。加曾利E系と唐草文・曾利系に分けて述べる。156~183・221は加曾利E系に属す。156・157・159・160は口縁部に隆帯による渦巻と楕円の横帶文をもつ。156・157は大形品。165は渦巻の部分を波頂部とし、158は沈線による楕円文となっている。163・164はこれらの胴部で幅狭の無文部が縄文部を縦に区切っている。164は



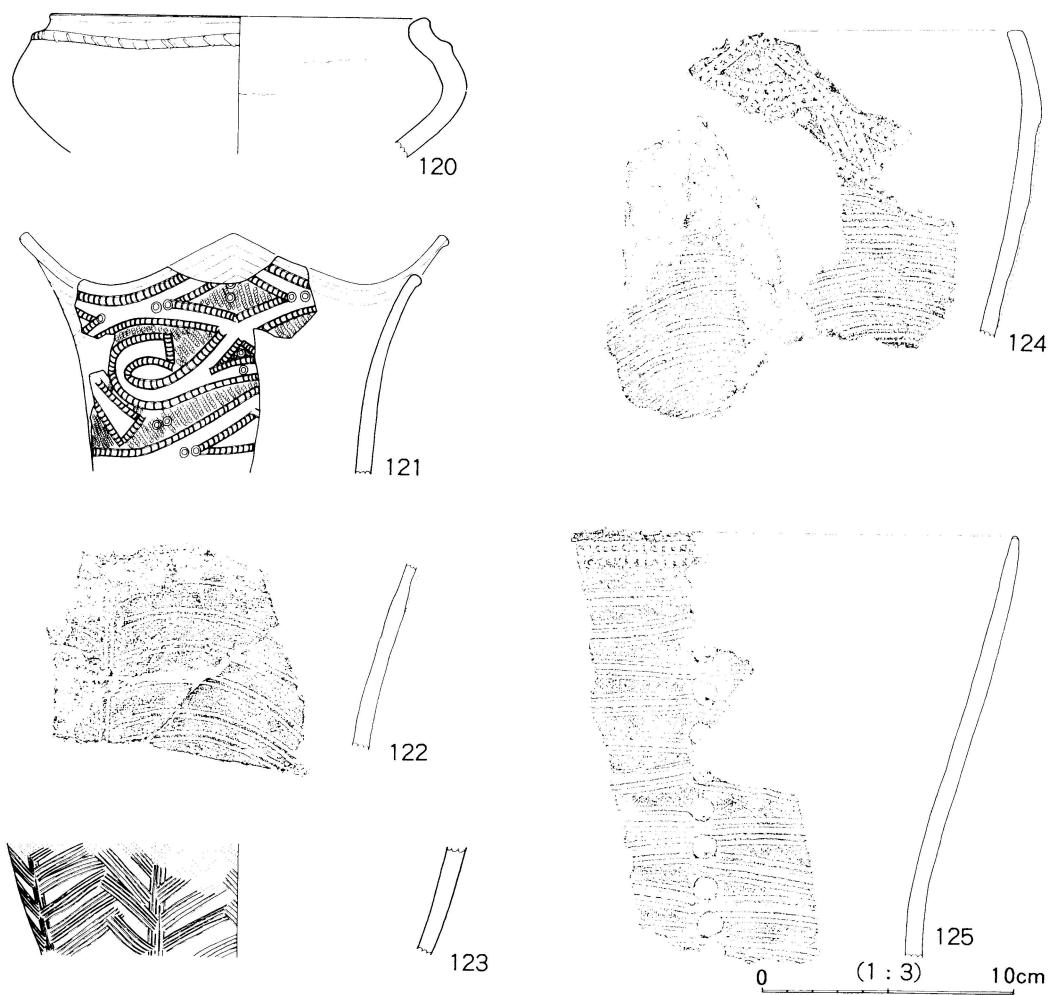
第11図 包含層出土土器拓本図（1）



第12図 包含層出土土器拓本図 (2)



第13図 包含層出土土器拓本図（3）



第14図 包含層出土土器拓本図(4)

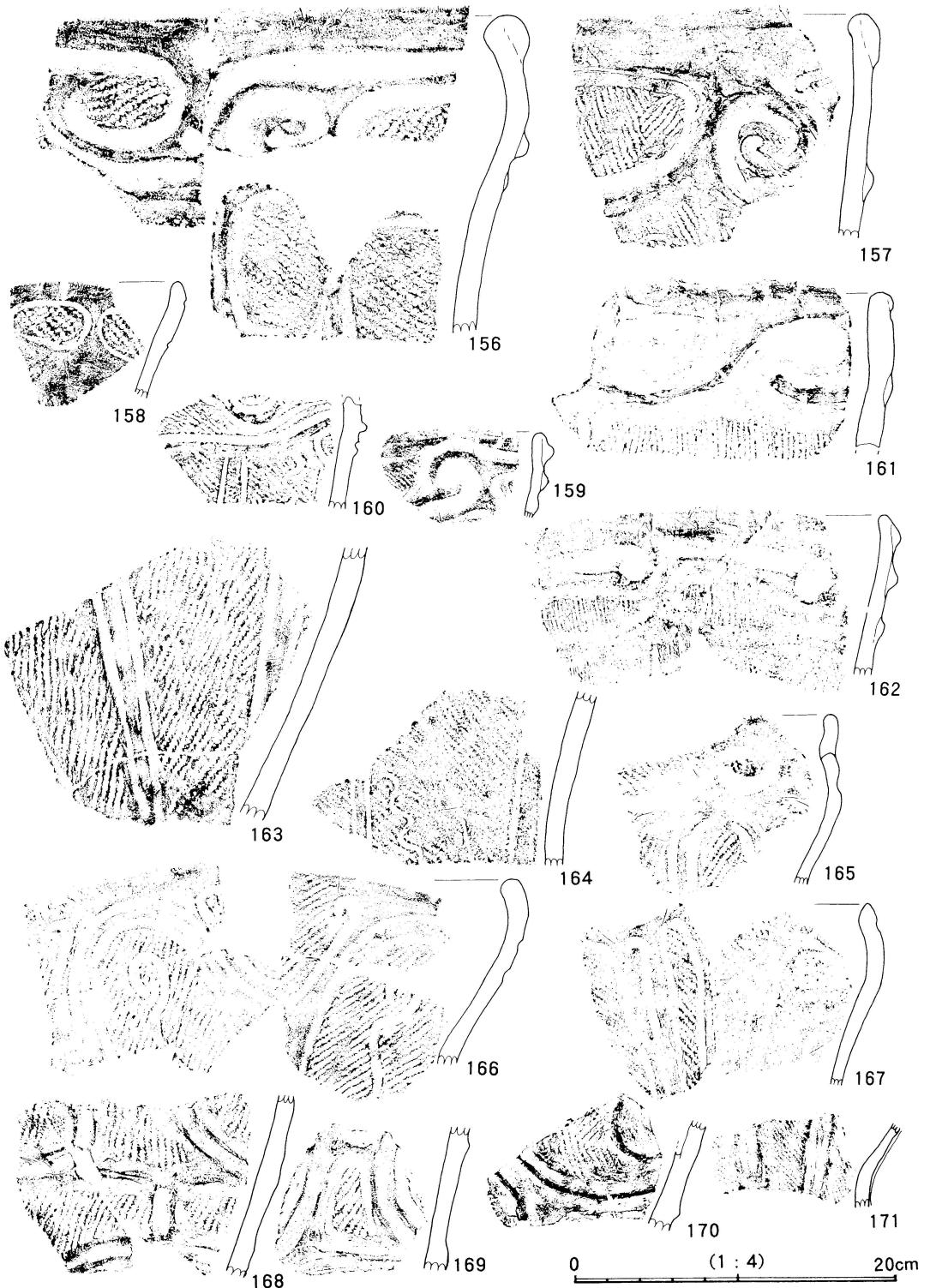
縄文部に蛇行沈線が入る。221は頸部に列点帯がめぐって無文帯を画す。161・162は同じ文様構成をとりながら、縄文にかわって条線を地文とする。180・181はこの胴部で、181は波状、180は唐草文系土器のように羽状に施文する。166～174・177・183は口縁部文様帯をもたないもので、166・167・170・174・183は沈線、168～171・173・177は隆帯で文様を描く。166は波状文と楕円区画、蕨手文を組み合わせる。167は波状口縁で、幅狭の楕円文間に蕨手文を配する。172は波頂部に橋状把手をもち、小さな楕円文を描く。174は口縁下に沈線をめぐらして無文部を画し、183は縦位沈線が描かれ、条線地文である。168～170は大柄な渦巻文を主文様とする。171は微隆起帯で縦区画された胴下部で、後出かもしれない。173は口縁に無文部をもち、楕円形の横帯文とつながった幅広の懸垂文が配される。177は波状口縁に微隆起帯が沿って波頂下で円文となる。この部分の粘土帯接合部だけに刻みが施され、製作中の波頂の目印のようでもある。これらはおむね加曾利EⅢ式に比定され、171・173・177は同IV式に近いものであろう。縄文原体は156に複節、173に付加条が用いられている。175・176は口縁下に微隆起帯をめぐらして無文部を画し、沈線による磨消縄文を描くらしい。178・179は波頂部に粘土紐を貼付けた突起で孔はなく、口縁下に微隆起帯をめぐらして縄文部が沿うらしい。これらは加曾利EⅣ式に比定される。182は波状の条線文をもち、同時期頃であろう。184～214は曾利・唐草文系である。184の頸部には竹管文と粘土紐の格子目文に波状隆帯が沿い、曾利I式に比定される。185は斜位の沈線地文に2本単位の隆帯で文様が描かれ、隆帯間は刺突される。186も2・3本単位の隆帯文をもち、縦位沈線地文の一部に横位沈線を施す。この2点は唐草文系I期と思われ、184とともに加曾利E系に先行し、出土量はきわめて少い。187・188は156などと同じ文様構成で沈線地文をもち、唐草文・曾利どちらとも言われるが、東信地方に多い。189～192・200は口縁部に隆帯の渦巻文をもつ。193～195・202はこれらの胴部で、隆帯で要所に渦巻文を配したり縦位区画を行う。地文は長めの沈線を密に施す。196・201・203は胴部を沈線で縦位区画し、197・198のように地文が蛇行したり渦を巻くものは佐久地方に多い。199は曾利式の籠目文土器に由来するものであろう。191・192・199・200は口唇内面が突出したり、粘土帯が貼付される。これらは唐草文系Ⅲ期に主体を置くであろう。204は口縁部に横帯文の名残りが見られ、206・210はこれを失って207・211のように無文部による縦位区画のみとなる。205・209は大柄な渦巻が描かれる。地文はまばらなハの字状の207・209・213や、雨滴状の212・214がある。これらは曾利V式または唐草文系IV期に位置づく。215・216・222は圧痕隆帯文土器で、口縁の渦巻から隆帯が垂下する群である。219は外面無文で赤彩の浅鉢、218は鉤手部、217は縦に紐を通す壺の把手部、220は鍔に縦の小孔をもつ鉢である。

第4群土器 (228・229) 後期では堀之内II式と加曾利B I式が合計10点程度出土した。

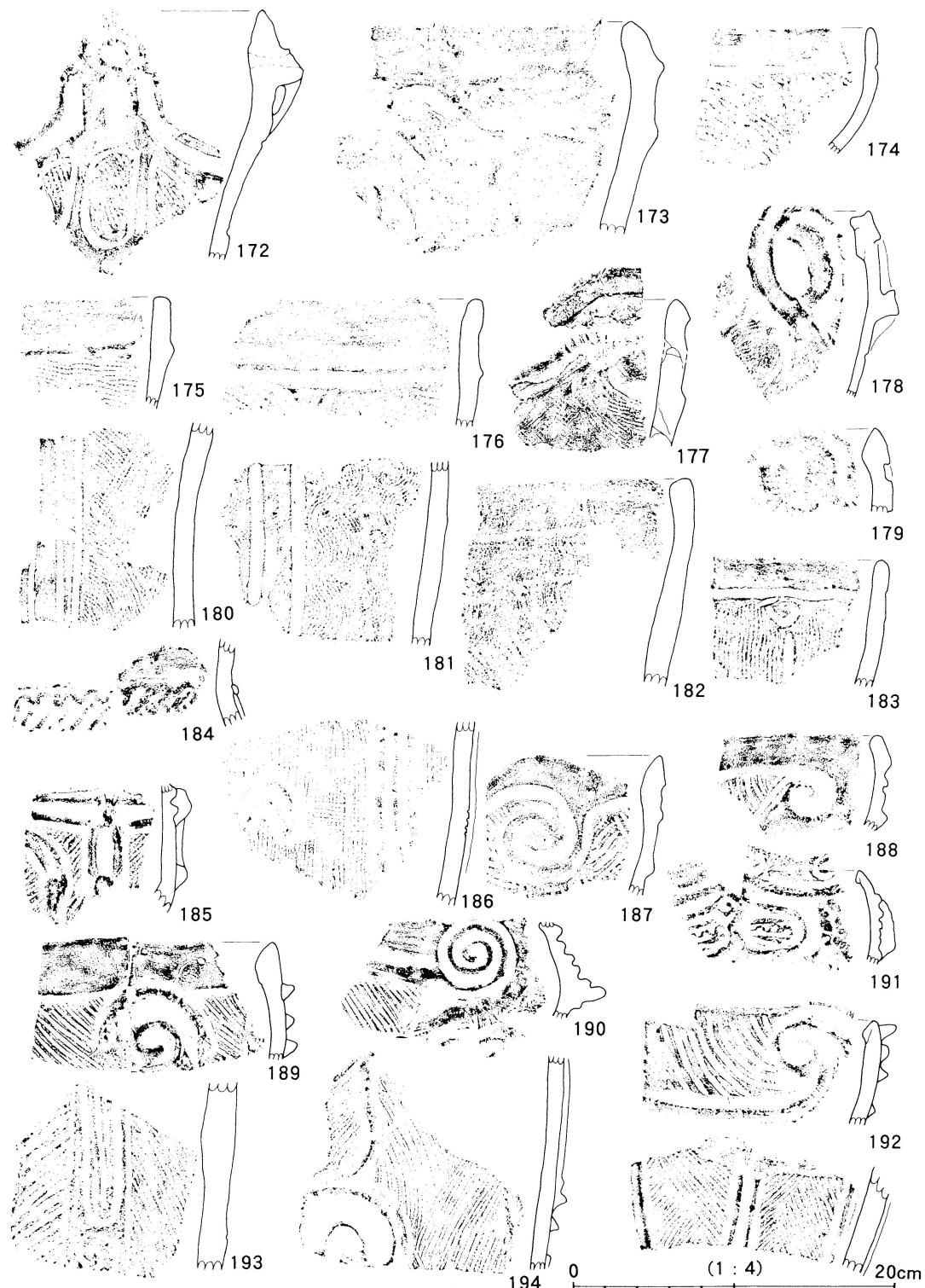
第5群土器 (223～227・230～265) 晩期後半から弥生中期初頭の土器で3箱程度出土した。230・231・233～242・254はいわゆる離山段階である。230は外傾する器形の浅鉢で、入組む浮線文には赤彩痕がある。233は内傾の浅鉢、235・238・242は深鉢、234・236・237・239～241



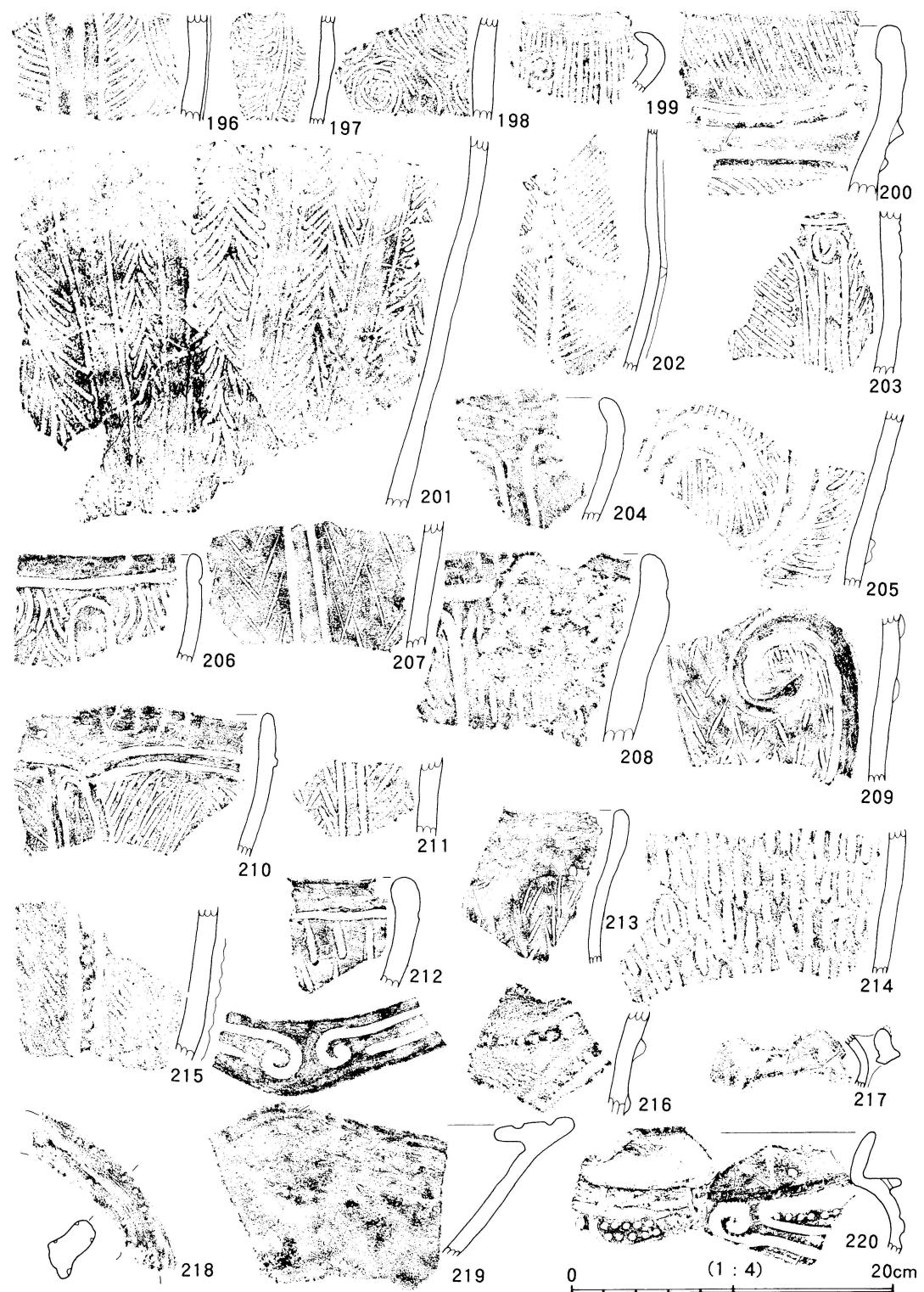
第15図 包含層出土土器拓本図(5)



第16図 包含層出土土器拓本図（6）

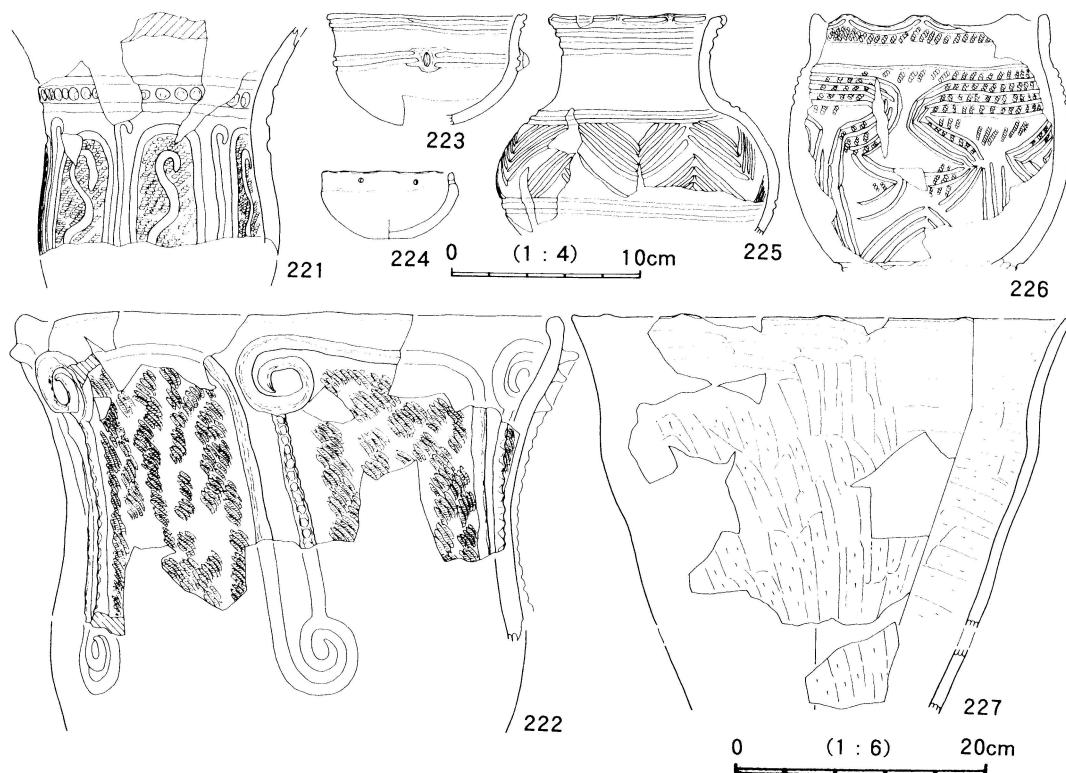


第17図 包含層出土土器拓本図(7)

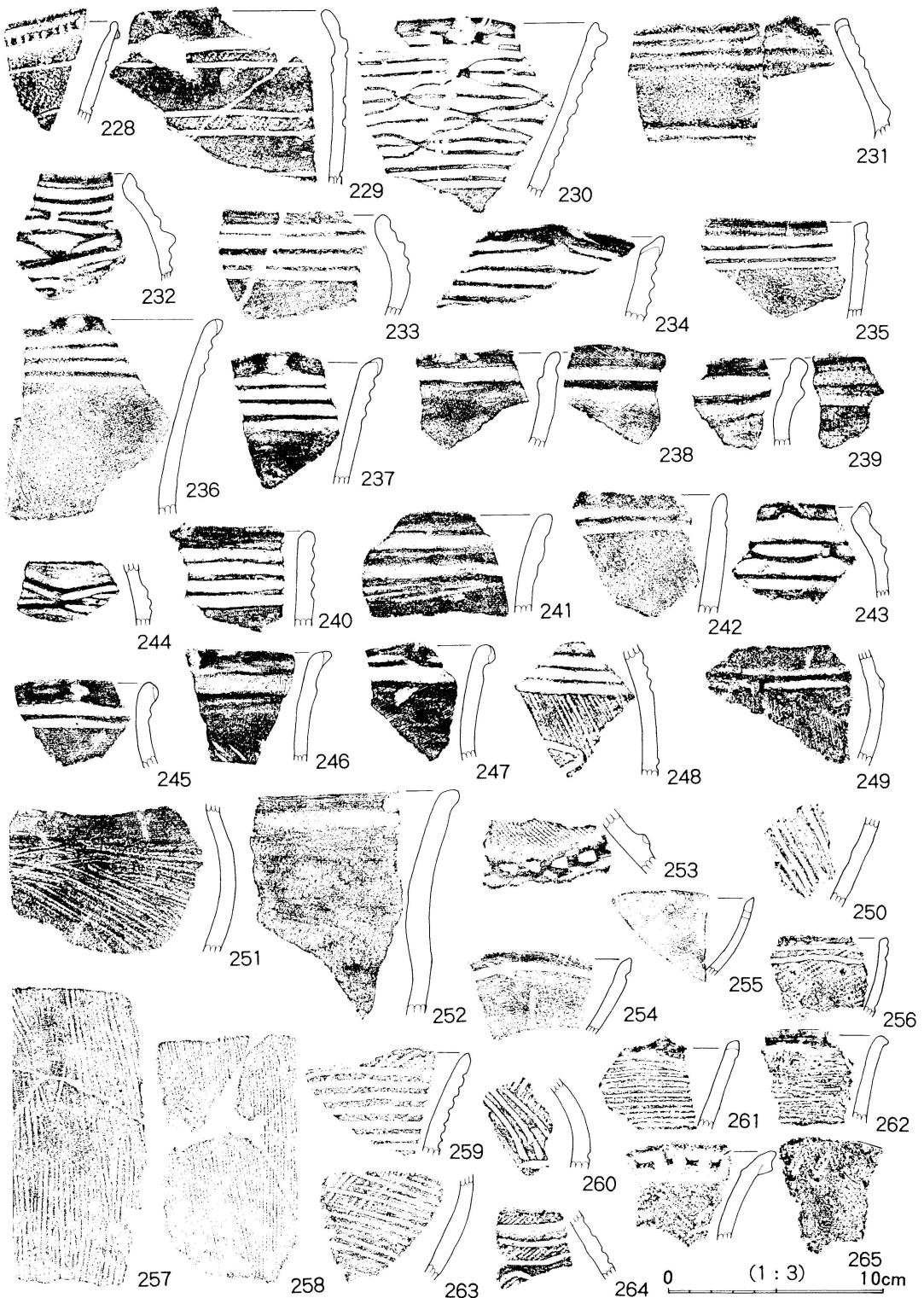


第18図 包含層出土土器拓本図（8）

は甕で、口縁内外に1~4条の平行沈線をもつ。237は内そぎ口縁である。231は灰黄褐色の胎土の浅鉢で、北陸西部あたりからの搬入品かもしれない。224・227・243~249・251・252・255・256~258は冰式に属し、243の浅鉢以外は後半段階に位置づく。このうち223~225・227・257・258は前期の1号住居址覆土上部から集中して出土した。223・224・255・256は小形の浅鉢で、224・255は小孔があり、223は沈線文をもつ。244は1段の浮線文をもつ浅鉢。225・245は壺で、225は平行沈線で上下に入組む鋸歯状文をもち、全面に赤彩痕を残す。甕では246・247・252の口縁部に隆線帯、沈線帯がある。248・249は肩部に浮線文をもつ。251・257・258は細密条痕の例で、248にはジグザク文がある。227は無文。232はいわゆる御社宮司型壺。226の広口壺は類例がないが、胴部の曲折ある平行沈線文は荒海貝塚第6群と似、胎土も他と異なる。259は鳥屋遺跡に類例がある。250・253・261~265は弥生前期後半から中期初頭の土器で、図示したもののがほとんどすべてである。253・260・264は沈線文や縄文をもつ壺、265は水神平式の壺で口縁内面に波状文をもつ。250・261~263は条痕文をもつ甕で、250は東海系胎土である。



第19図 包含層出土土器拓本図（9）



第20図 包含層出土土器拓本図（10）

2 石器

本調査で出土した石器全体の内訳は次のとおりである。

神子柴型尖頭器3、石鎌203（凹・平基完形37、欠損86、未成品69、有茎11）、石錐23、石匙13、スクレーパー63、使用痕ある剥片21、ピエスエスキュー17、石核・剥片類15,636g（黒曜石13,043g、その他2,593g）、打製石斧20、磨製石斧5、磨石・凹石類97、特殊磨石5、石皿7、台石11。

前述のとおり、出土した縄文土器が早期から晩期後半にわたるため、石器の帰属時期が特定できない。このうち、1号住居址は諸磯a式期の遺構で出土遺物も多いため、本址およびこれにかかるグリッドB4・5・10、B-4・5、C1-1出土の石器を抽出すると、次のとおりとなる。ただし、覆土上部から五領ヶ台式や氷式後半段階も出土しているため、石器は前期のみに限定はできないが、出土状態から石皿・台石は本址に伴うと見られる。

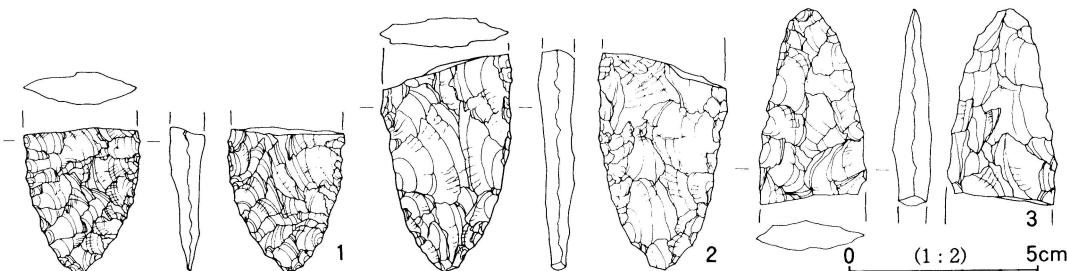
石鎌56（凹・平基完形12、欠損30、未成品14）、石錐9、石匙6、スクレーパー21、使用痕ある剥片3、ピエスエスキュー4、石核・剥片類5,024g（黒曜石4,199g、その他825g）、打製石斧3、磨製石斧1、磨石・凹石類29、特殊磨石1、石皿6、台石9。

神子柴型尖頭器（第21図1~3）欠損品が3点出土し、2・3はC-14から接近して出土した。1は黒曜石、2・3は安山岩。1は現存長3.8cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、横長剥片に斜行剥離を施す。2は現存長5.7cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmで、基部は1より狭い。3は先端部で現存長5.1cm、幅2.8cm、厚さ1.0cmで、中央部がやや薄い。2・3は幅の広い剥離で成形し、一部は階段状をなす。いずれも木葉形尖頭器である。

石鎌（PL.7）1~30は1号住居址と関係グリッド出土の完成品、47~60は未成品と思われるもの、他はそれ以外のグリッドの出土。19のチャートを除き黒曜石である。1~20は長さに対して幅が広い形態で、大きさにバリエーションがある。21~29は幅の狭い形態。30は局部磨製石鎌の欠損品。44~46は有茎鎌である。

石錐（PL.8-1）1~24のうち、4の硬砂岩を除き黒曜石である。1~9は1住・関係グリッド出土。基部を大きく作り出す7~9・22・24、厚手の剥片形態をとどめ、断面三角形の刃部をもつ2・3・5・6・17~21、特に細身の1・10・13・15・16・23などがある。

石匙（同）30・31以外、1住・関係グリッド出土。30・31は黒曜石、26は硬砂岩、他はチャ-



第21図 尖頭器実測図

ト。すべて横形である。

スクレーパー (PL.8-2) 1~22のうち、1~11・17は1住・関係グリッド出土。6・16が砂岩、7がチャート以外、黒曜石。円形で急角度の刃部をもつ1・11・12・14、楕円形の側縁部にやや緩い角度の刃部をもつ6~10・15~18、長い不定形剥片の1側縁を主として連続的に小剥離を施す2~5・19~22などがある。

使用痕ある剥片 (同) 23~30のうち、23・30が1住出土。すべて黒曜石。縁辺にスクレーパーより細かな剥離痕が認められる剥片を本種としたが、形態上は19~22などと区別できない。

石核・剥片類 (PL.9) 上はB-4・5、下はB-4出土の黒曜石。上はズリ石と呼ばれる原石と剥離の進んでいない石核、下は主として残核に近いものを抽出した。

打製石斧 (PL.10) 1~17のうち、1~3は1号住・関係グリッド、4は7号土壙、5は2号土壙出土。形態は撥形が多い。石質は9が珪化を受けた岩石、16は安山岩で近在の産、1・2・4は細粒砂岩、他は千枚岩で、ともに関東山地に産出するため、入手経路に興味をもたれる。4・6~8・10は刃部が摩耗する。摩製石斧とともに、消耗・欠損したものが多い。

磨製石斧 (同-2) 18~22で、18は変質輝緑岩、19は変質玄武岩、20・21はガラス質安山岩、22は細粒砂岩または粘板岩。1号住居址出土の19は欠損した刃部の上端を加擊して再加工する。

磨石・凹石類 (PL.11・12-1) 磨痕にくぼみ、敲打痕をもつものを本種に一括した。1~16は1住と関係グリッド出土。5・12・14はデイサイト、6・7は閃緑岩、16は玢岩、2は関東山地のシャールスタイルできわめて重く、他は安山岩。1~3・5はくぼみをもち、4・6はアバタ状の敲打痕をもつ。長身の7・9は両端、球状の12と偏平な14は側縁に敲打痕をもつ。磨痕のみの10・11・13は磨面が黒変している。15は偏平・長方形で、両側縁は面取りしたようである。16は特殊磨石。17~32は偏平な円または楕円形でくぼみをもつ。36~38はやや不整形、43~47は長身で敲打痕をもち、46は両端が剥落する。48は特殊磨石。40はチャートの両端がつぶれ、一種のハンマーであろう。21・22・30・36・41は磨面が黒変している。

石皿 (PL.12-2・13) 2・3はくぼみが深い。4は現存長27cmで縁は緩く立ち上がる。5は長さ39cm、幅24cmで、くぼみ部は幅12cmを測り片口状である。6は現存幅36cmの大形、7は長さ31cmの小形で緩くくぼむ。7が閃緑岩以外、安山岩。2・4・6はくぼみ部に黒変が見られる。

台石 (PL.13) 8は長さ50cm、9は42.5cm、10は32.6cm、11は35.7cmを測る。わずかに磨耗が認められ、11は黒変している。9・10は安山岩、8・11は閃緑岩。

3 土製品・石製品

土製品（第22図）

土製円板（1～4）1は五領ヶ台Ⅱ式に比定され、長径5.6cmの楕円形で周縁は研磨される。2は長径3cmの不整円形で打ち欠きのみ。1住出土で諸磯式と思われる。4は氷式後半段階の深鉢口縁部で、長径4cm。3は無文で周縁を研磨され、長径3.5cm。晚期であろうか。

ミニチュア土器（5）高さ5.1cm、口径3.7cmの円筒形で平底、内面に輪積み痕を残す。

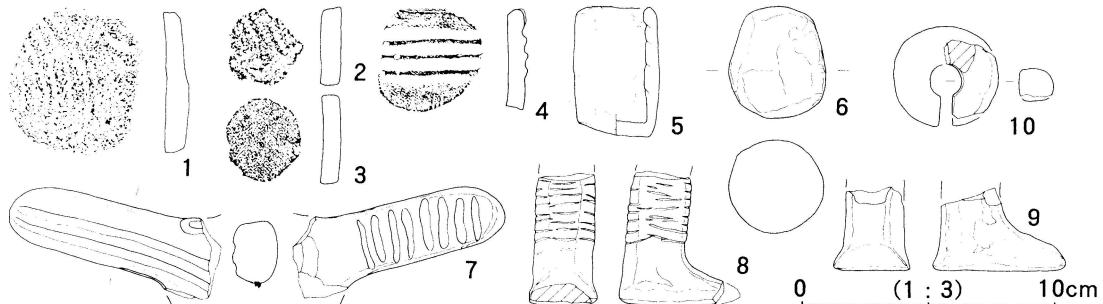
土鈴（6）高さ4.4cm、直径3.7cmの俵形で、数個の小礫を内蔵しているらしく、カラカラと硬質の音をたてる。雲母の目立つ砂の多い胎土で、五領ヶ台式に伴うものか。

土偶（7～9）7は2号土墳から出土し、斜め上にあげたポーズの右腕と思われる。前面は2条の沈線、後面は短沈線を描く。8・9は中期後半土器に混って接近して出土したが、別個体の足かもしれない。8には横位の細沈線が施され、わずかに前傾する。腰部との剥離面には芯棒の痕らしい黒斑を認める。9は無文である。

石製品（同、PL.12-2）

玦状耳飾（10）1号住出土。滑石製で直径4cm前後の円形と推定され、裏面欠損ながら厚さ1cmを測る。孔は直径1.2cm程度。

石棒（PL.12-2）C一区の北東隅で中期後半土器や土偶とともに出土した。安山岩で現存長28cm、頭部径13.8cmを測り、裏面は剥落する。この他に石棒の可能性のある結晶片岩が1点出土している。



第22図 土製品・石製品実測図

第5章 む す び

発掘調査の結果、本遺跡は旧石器時代から弥生時代に至るまで、断続して営まれてきたことが明らかになった。調査の成果については各項で述べられているとおりであるので、ここでは時代をおって若干の考察を試み、まとめとしたい。

渕ノ上遺跡が所在する小県郡丸子町の歴史は、縄文時代草創期の土器片が出土した鳥羽山洞窟遺跡から始まるとしてきたが、今回の調査で3点の神子柴型尖頭器が検出され、旧石器時代末期までさかのほる可能性が出てきた。本遺跡ではこのほか少量ながら早期の樋沢式や田戸下層式も検出され、縄文時代も初期から営まれていたことが明らかとなった。縄文時代前期の住居址の検出は丸子町で2例目である。住居址は南側半分が遺存していただけであるが、北向きの斜面に建てられている。縄文前期の土器がほぼ継続して出土しているが、主体は諸磯a式と思われる。この中で前期前半には関山式など関東系土器が見当らない。また少量ながら関西系の北白川下層式を伴出した点は注目される。石器では石皿・台石や磨石など植物加工具の出土が多い。また、玦状耳飾は東信では稀少な例で、縄文時代前期の良好な資料になると思われる。なお、1号住居址を切っている7・8・9号土壙もこの時期である。

出土土器の半分以上を縄文時代中期後半の土器が占め、前半に属するものは少量であった。このうち五領ヶ台式は一昨年調査した下久根遺跡に若干先行するものである。中期土器の出土地点は、大半がC-1区の緩斜面に堆積した黒褐色土層の中から出土しており、さながら土器溜りのようである。完形となる破片はほとんどなく、打ち捨てられたような印象を受ける。加曾利EⅢ式期を中心としており、組成の点では曾利・唐草文系と伯仲している。また、磨石・凹石を中心に石器類も数多く出土し、石棒や土鈴もみられた。1~6号土壙は中期の土壙と思われ、大正時代の記録や1号土壙などの位置から、平坦面上に中期後半の集落が展開していたことは疑いないであろう。縄文後期の土器は数片が出土したにすぎない。

本遺跡は完形の容器形土偶2体の出土遺跡として早くから学界に知られてきたものの、土偶の時期に相当すると考えられる他の遺物は未確認のままであった。しかし今回の調査では縄文晚期後半から弥生中期初頭の土器が3箱程度出土した。これらは(1)小諸市氷遺跡出土第1群土器に先行する、いわゆる離山段階、(2)松本市石行遺跡土器集中区7などの、氷式後半段階、(3)水神平式を含む弥生前期後半から中期初頭段階、の3時期に分かれ、(2)段階では3点の完形品を含む土器が1号住居址覆土上部から集中して出土した。これらのうち、(3)段階の資料はきわめて少量の出土ながら、研究の現状からすれば容器形土偶の時期を示唆する資料として、特筆される成果である。

縄文時代全般にわたる生活拠点として営まれた本遺跡も、弥生時代以降はしばらく人跡を残さないようで、少数の内耳鍋と青磁碗の出土から、再び活況を呈するのは中世後半以降のことのよ

うである。

以上、今回の調査により明らかにされた代表的な成果について述べてみたが、本調査の成果が地域の歴史解明に役立てば幸いである。最後に本調査にご指導、ご協力をいただいた大勢の方々に心から感謝の意を表したい。

引用参考文献

(編著者名五十音順)

- 網谷 克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
今村 啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要4』
 笹森 健一他 1987 『鷺森遺跡の調査』上福岡市教育委員会
 高野 豊文他 1982 『丸子町地域開発史』丸子町教育委員会
 中部高地縄文土器集成グループ 1979 『中部高地縄文土器集成 第1集』
 中沢 道彦 1991 「中部高地ブロック」『東日本における稻作の受容』
 長野県史刊行会 1988 『長野県史考古資料編 全1巻 (4) 遺構・遺物』
 野中 松夫 1983 『江ガ崎貝塚・御殿場遺跡・荒川附遺跡』蓮田市教育委員会
 宮下 健司 1983 「縄文土偶の終焉—容器形土偶の周辺—」『信濃』第35巻第8号
 百瀬忠幸他 1990 『四日市遺跡』真田町教育委員会
 縄田 弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要2』
 タイ 1989 「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『縄文中期の諸問題』

図 版



1. 遺跡遠景（北から）





1. 発掘作業



2. 土層断面



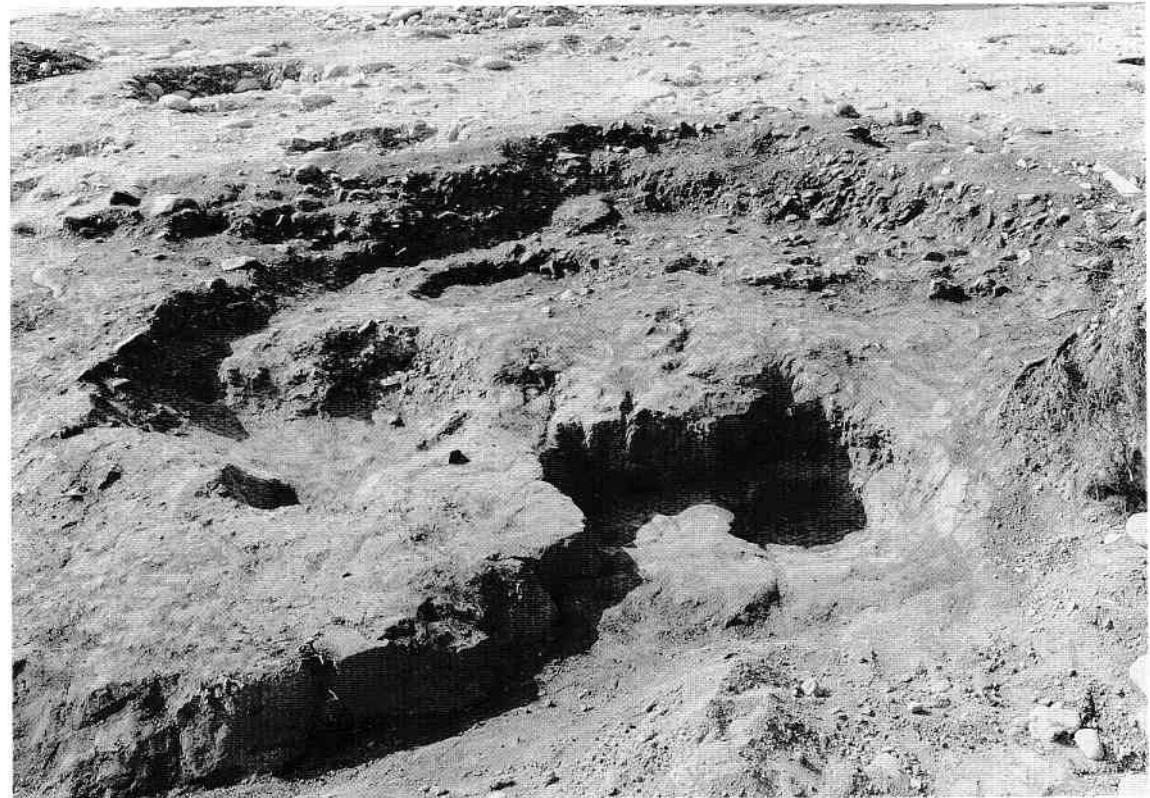
1. 1号住居址遺物出土状態



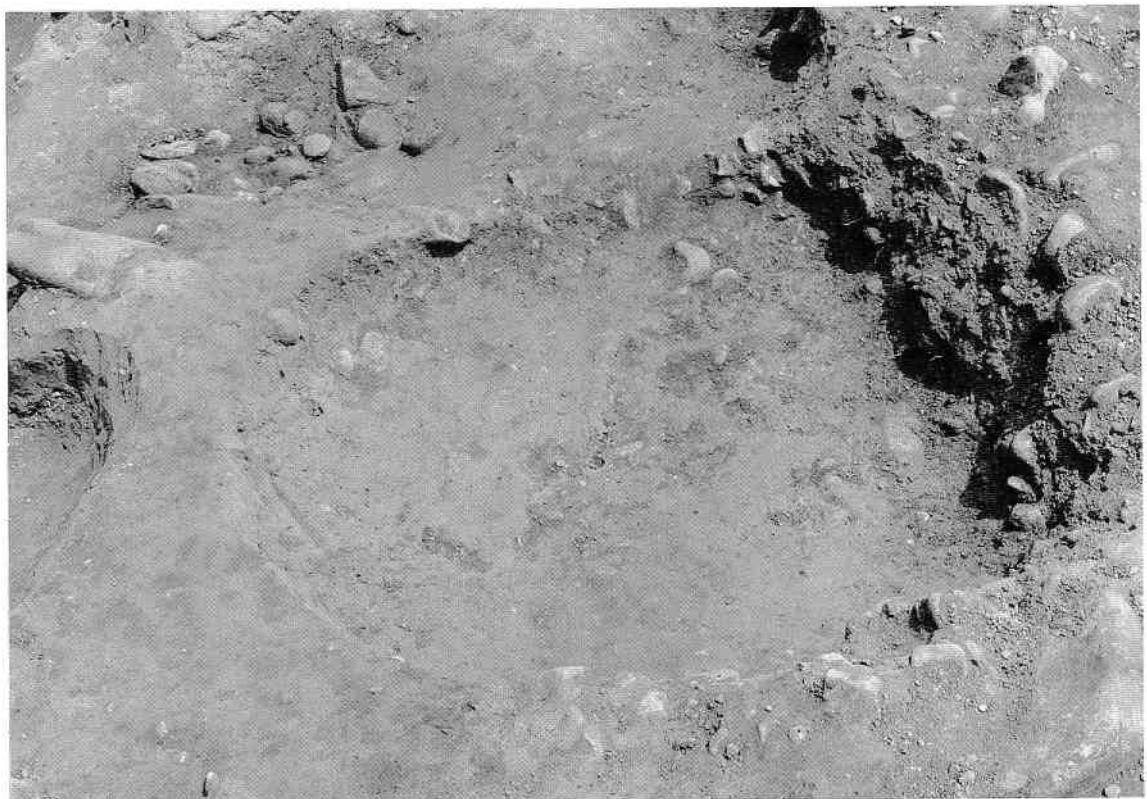
2. 北東地区遺物出土状態



1. 1号住居址・7・8・9号土壤(北西から)



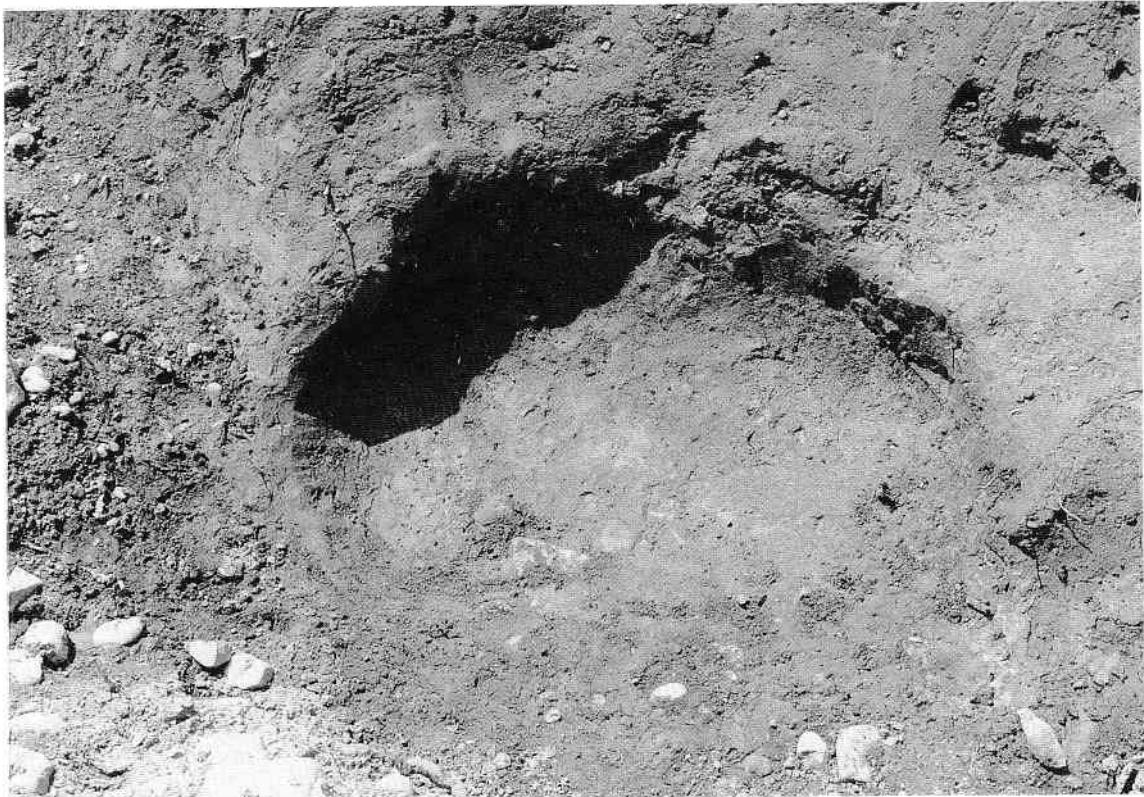
2. 1号住居址・7・8・9号(北から)



1.2号土壤



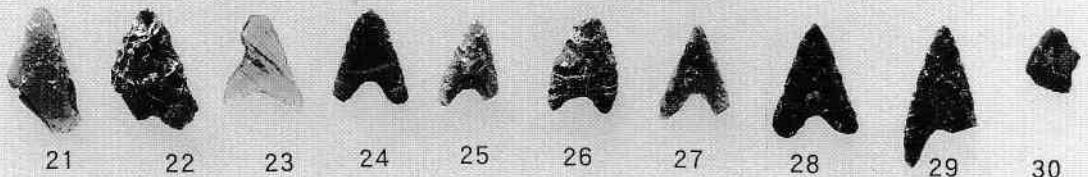
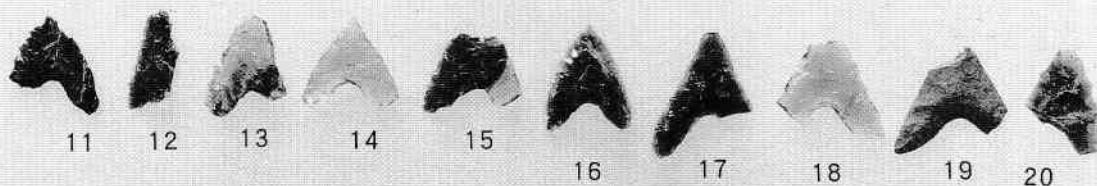
2.3号土壤



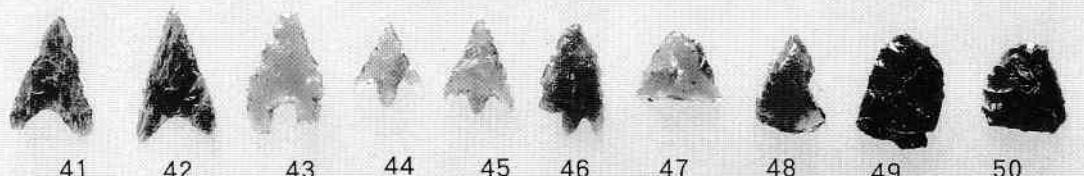
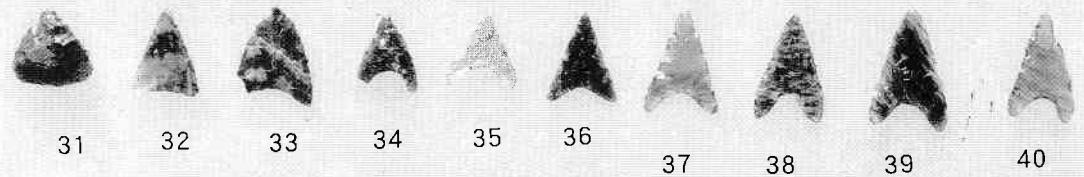
1. 5号土壤



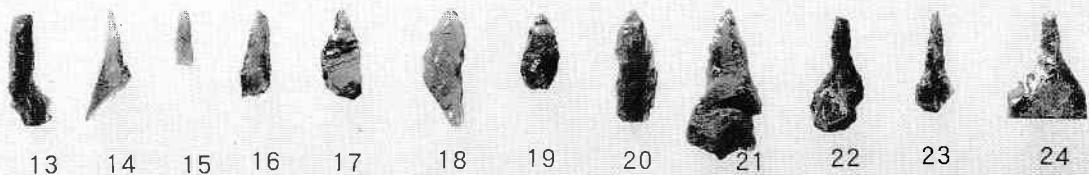
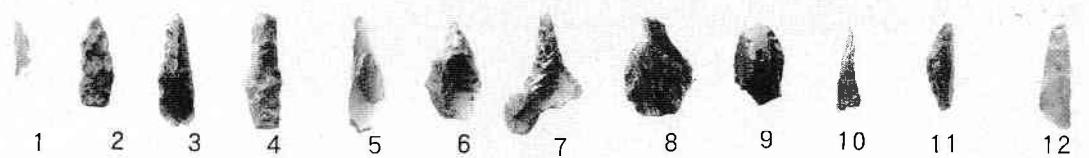
2. 6号土壤



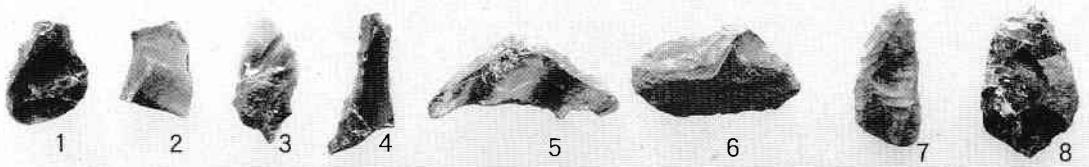
1. 石 鏃(1)



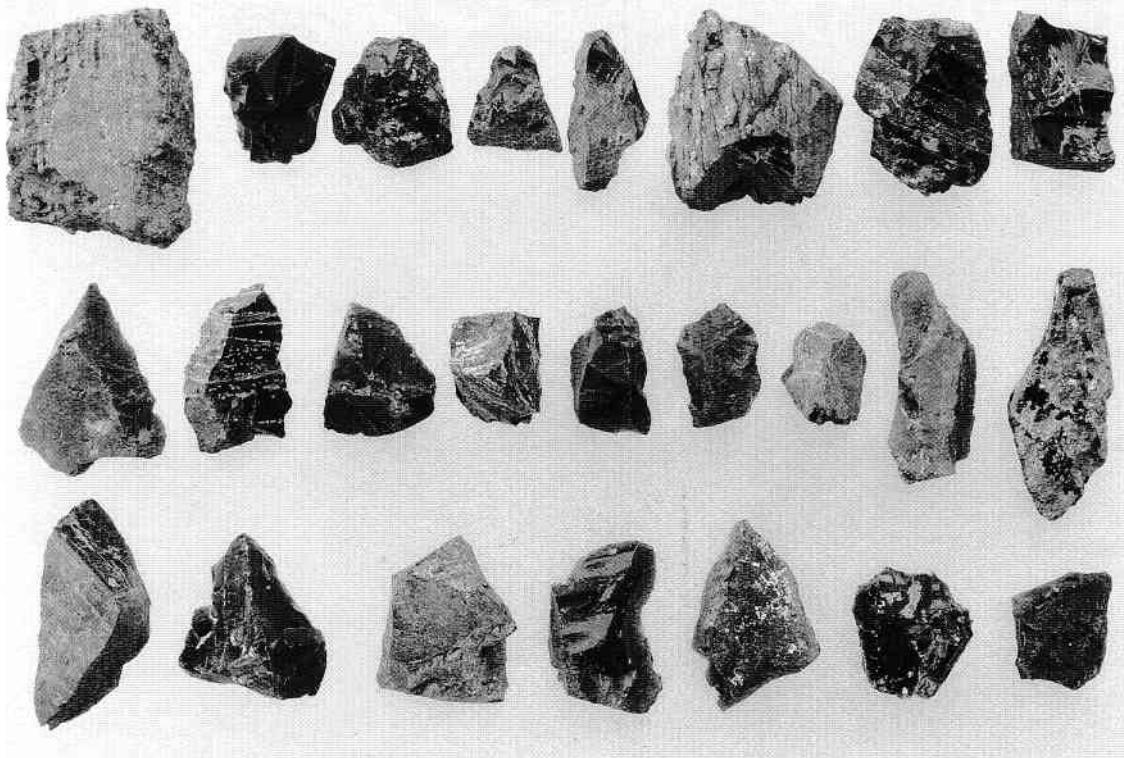
1. 石 鏃(2)



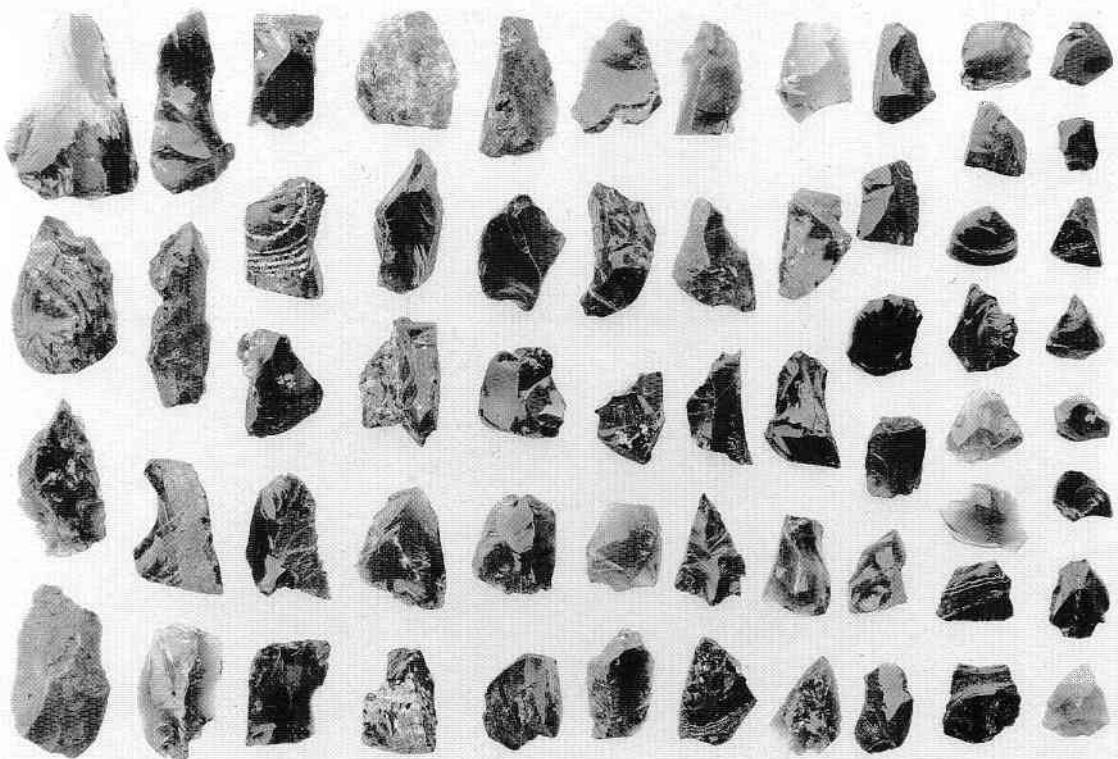
1. 石錐・石匙



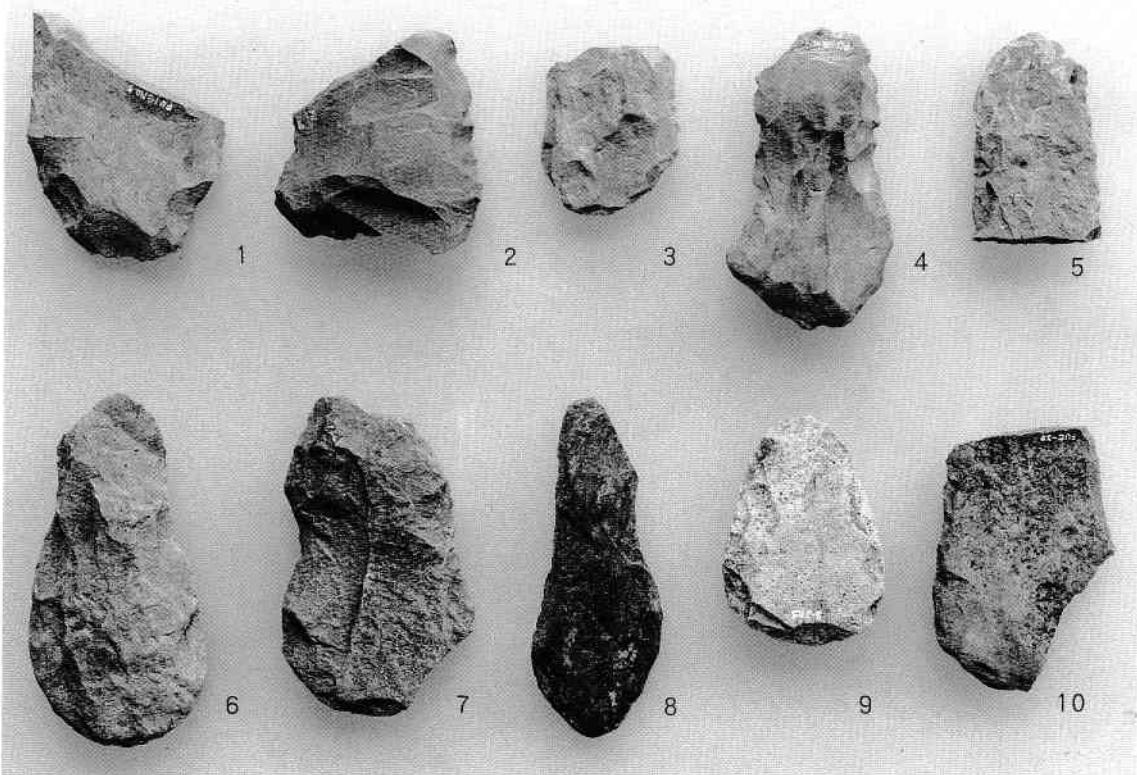
2. スクレイバー・使用痕のある剥片



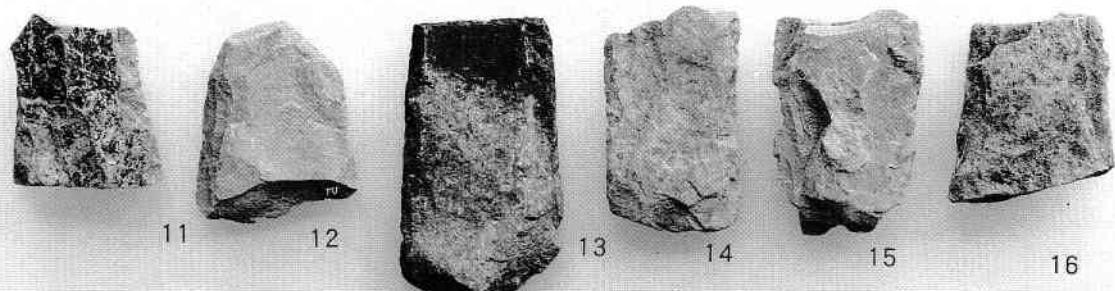
1. 原石·石核



2. 石核·剥片



1. 打製石斧(1)



17

18

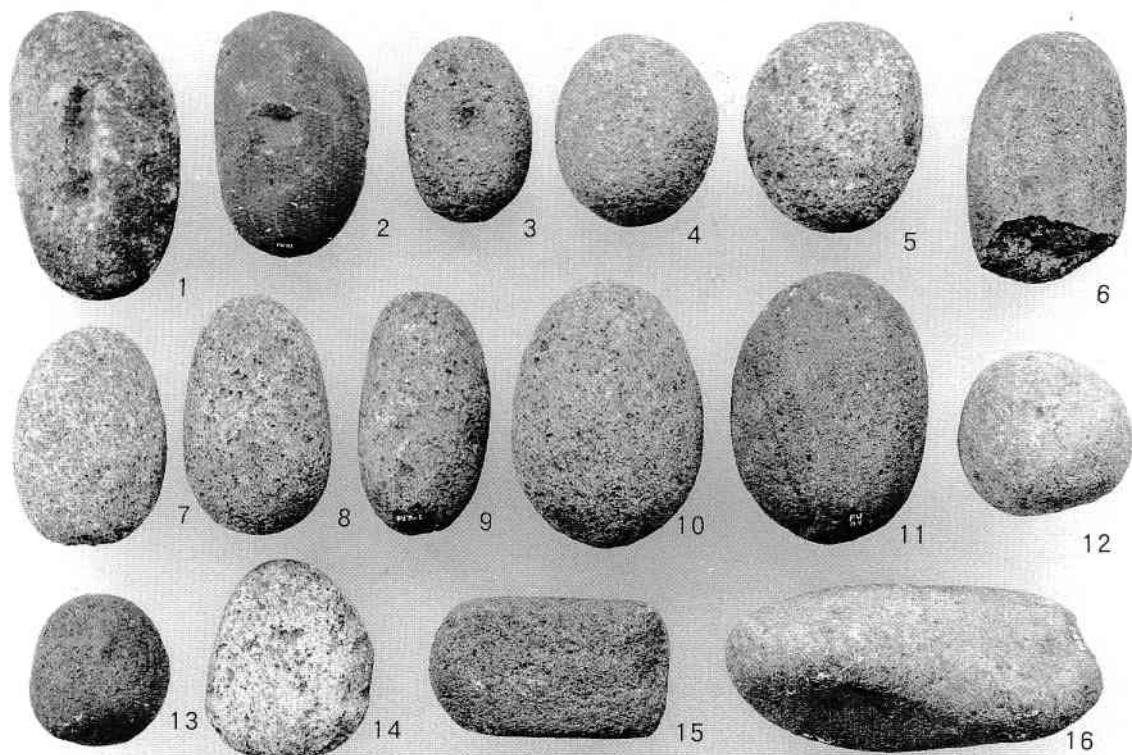
19

20

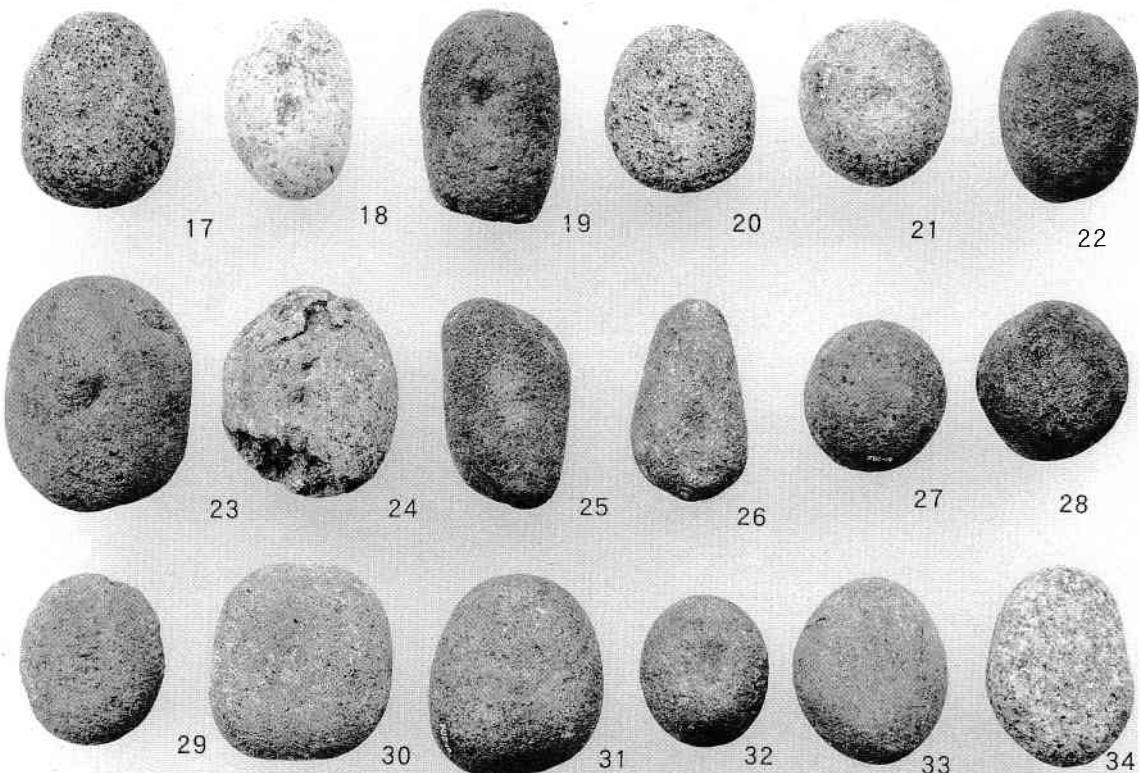
21

22

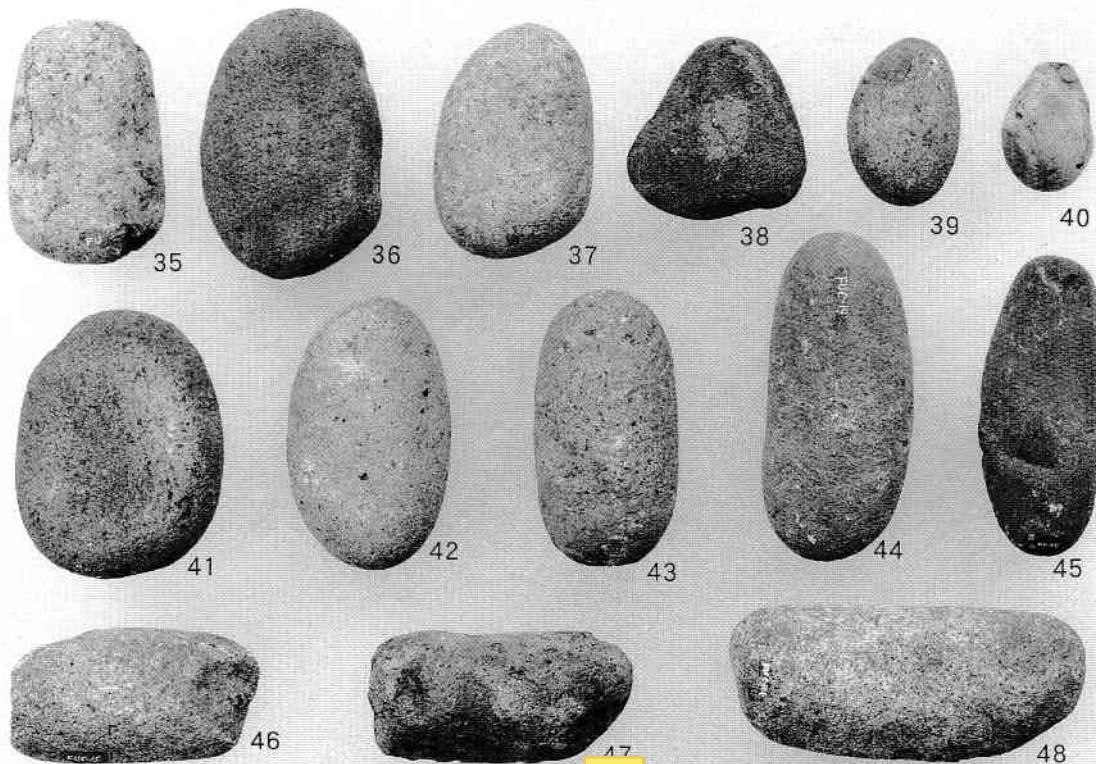
2. 打製石斧(2) · 磨製石斧



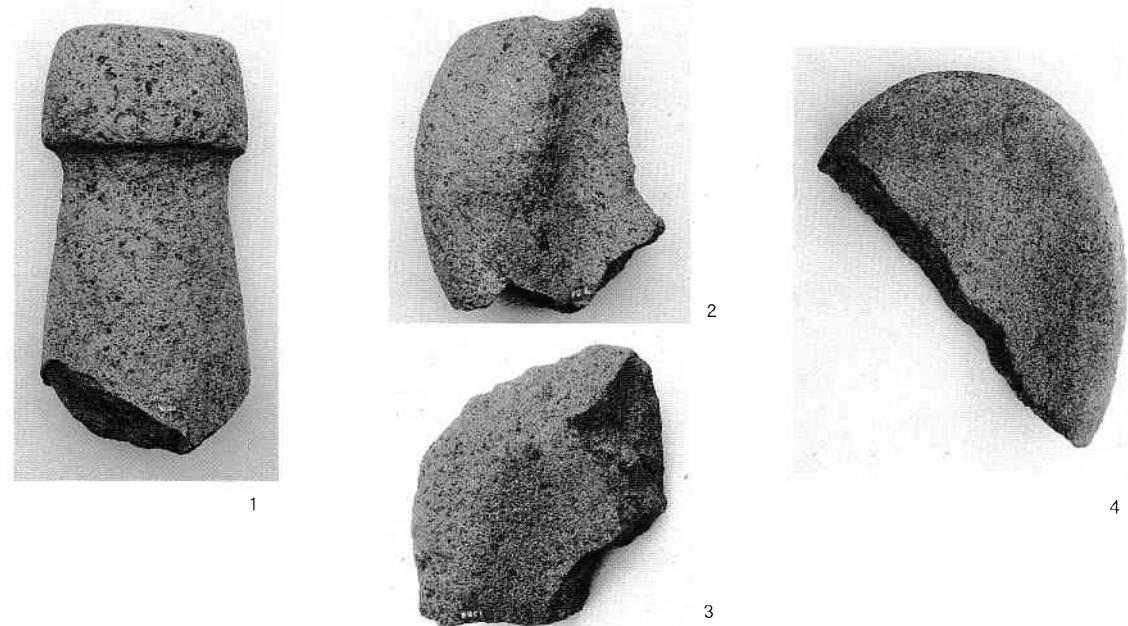
1. 磨石・凹石(1)



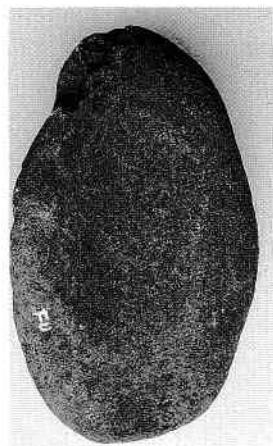
2. 磨石・凹石(2)



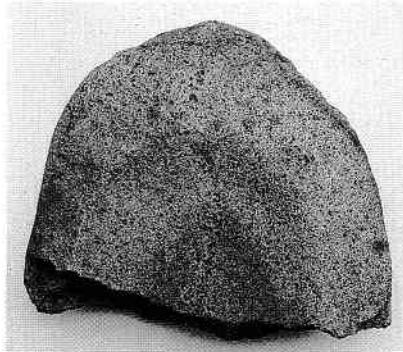
1. 磨石·凹石(3)



2. 石棒·石皿



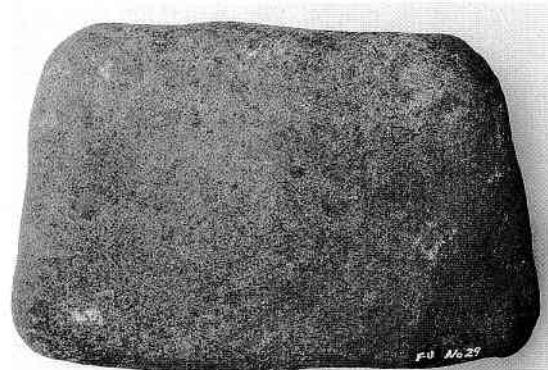
5



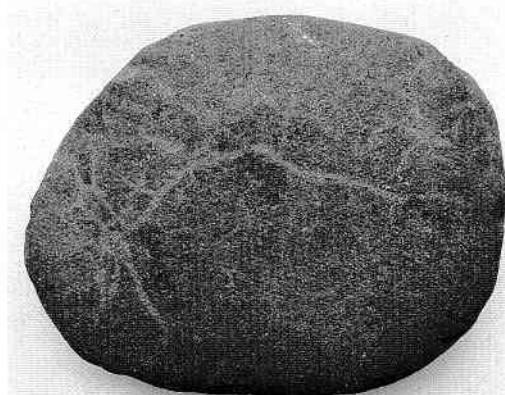
6



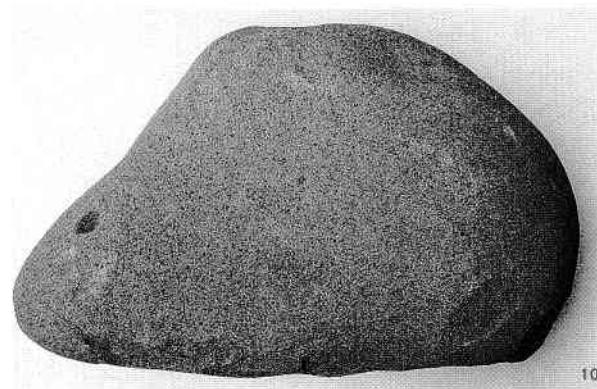
7



8



9



10



11

渕ノ上遺跡

—長野県小県郡丸子町渕ノ上遺跡発掘調査報告書—

平成4年3月15日 印刷・発行

編 集 丸子町腰越地区埋蔵文化財発掘調査団

発 行 丸子町教育委員会

〒386-04 長野県小県郡丸子町上丸子1592-2

TEL (0268)42-3147

印 刷 有限会社大和印刷

〒386-04 長野県小県郡丸子町上丸子901

TEL (0268)42-2597
